

# 源氏物語

若菜（下）

紫式部

青空文庫



二ごころたれ先まづもちてさびしくも悲

しき世をば作り初そめけん  
（晶子）

小侍従が書いて来たことは道理に違いないがまた露骨なひどい言葉だとも衛門督えもんのかみには思われた。しかももう浅薄な女房などの口先だけの言葉で心が慰められるものとは思われないのである。こんな人を中へ置かず一言でも直接恋しい方と問答のできることは望めないのであるろうかと苦しんでいた。限りない尊敬の念を保持している六条院に穢おしよく辱くを加えるに等しい欲望をこうして衛門督いだが抱くようになった。

三月やよいの終わる日には高官も若い殿上役人たちも皆六条院へ参つた。氣不精になつている衛門督はこのことを皆といつしよにするのもおつくうなのであつたが、恋しい方のおいでになる所の花でも見れば氣の慰みになるかもしれぬと思つて出て行つた。賭かけゆみ弓の競技が御所で二月にありそうでなかつた上に、三月は帝みかどの母后の御忌ぎよきづき月でだめであることを残念がつている人たちは、六条院で弓の遊びが催されることを聞き伝えて例のように集まつて来た。左右の大將は院の御養女の婿であり、御子息であつたから列席するのがむろんで、そのために左右このえふの近衛府の中將に競技の参加者が多くなり、小弓という定めであつたが、大弓の巧者な人も来ていたために、呼び出されてそれらの手合わせもあつた。殿上役人

でも弓の芸のできる者は皆左右に分かれて勝ちを争いながら夕べに至った。春が終わる日の霞かすみの下にあわただしく吹く夕風に桜の散りかう庭がだれの心をも引き立てて、大将たちをはじめ、すでに酔っている高官たちが、

「奥のかたがたからお出しになった懸賞品が皆平凡な品でないのを、技術の専門家にだけ取らせてしまうのはよろしくない。少し純真な下手者へたものも競争にはいりましょう」

などと言って庭へ下りたお。この時にも衛門督えもんのかみがめいっただふうでじつとしているのがその原因を正確ではないにしても想像のできる大将の目について、困ったことである。不祥事が起こってくるのではないかと不安を感じだし、自分までも一つの物思いので

きた気がした。この二人は非常に仲がよいのである。大将のために衛門督が妻の兄であるというばかりでなく、古くからの友情が互いにあつて睦まじい青年たちであるから、一方がなんらかの煩悶んもんにとらえられているのを、今一人が見てはかわいそうで堪えられがたくなるのである。衛門督自身も院のお顔を見ては恐怖に似たものを感じて、恥ずかしくなり、誤った考えにとらわれていることはわが心ながら許すべきことでない、少しのことにも人を不快にさせ、人から批難を受けることはすまいと決心している自分ではないか、ましてこれほどおそれおおいことはないではないかと心を鞭むちうっている人が、また慰められたくなつて、せめてあの時に見た猫でも自分は得たい、人間の心の悩みが告げられる相

手ではないが、寂しい自分はせめてその猫を馴なつけてそばに置きたいとこんな気持ちになつた衛門督は、氣違いじみた熱を持って、どうかしてその猫を盗み出したいと思うのであるが、それすらも困難なことではあつた。

衛門督は妹の女御によごの所へ行つて話すことで悩ましい心を紛らせようと試みた。貴女きじよらしい慎しみ深さを多く備えた女御は、話し合つている時にも、兄の衛門督に顔を見せるようなことはなかつた。同きようだい胞ですらわれわれはこうして慣らされているのであるが、思いがけないお顔を外にいる者へ宮のお見せになつたことは不思議なことであると、衛門督えもんのかみもさすがに第三者になつて考えれば肯定できないこととは思われるのであるが、熱愛を持つ人に

対してはそれを欠点とは見なされないのである。衛門督は東宮へ伺候して、むろん御兄弟でいらせられるのであるから似ておいでになるに違いないと思つて、お顔を熱心にお見上げするのであつたが、東宮ははなやかな愛嬌あいきょうなどはお持ちにならぬが、高貴の方だけにある上品に艶えんなお顔をしておいでになつた。帝のお飼ひになる猫の幾足ひきかの同胞きょうだいがあちらこちらに分かれて行つてゐる一つが東宮の御猫にもなつていて、かわいい姿で歩いているのを見ても、衛門督には恋しい方の猫が思い出されて、

「六条院の姫宮の御殿におりますのはよい猫でございます。珍しい顔でして感じがよろしいのでございます。私はちよつと拝見することができました」



こんなことを申し上げた。東宮は猫が非常にお好きであらせられるために、くわしくお尋ねになった。

「支那しなの猫でございました、こちらの産のものとは変わっております。皆同じように思えば同じようなものでございますが、性質の優しい人馴なれた猫と申すものはよろしいものでございます」  
 こんなふうなに宮がお心をお動かしになるようにばかり衛門督は申すのであつた。

あとで東宮は淑景舎しげいしやの方かたの手から所望をおさせになつたために、女三によさんの宮みやから唐猫からねこが献上された。噂うわさされたとおりに美しい猫であると言つて、東宮の御殿の人々はかわいがつていたのであつたが、衛門督は東宮は確かに興味をお持ちになつてお取り寄

せになりそうであると観察していたことであつたから、猫のことを知りたく思つて幾日かののちにまた参つた。まだ子供であつた時から朱雀院すざくくわんが特別にお愛しになつてお手もとお使いになつた衛門督であつて、院が山の寺へおはいりになつてからは東宮へもよく伺つて敬意を表していた。琴など御教授をしながら、衛門督は、

「お猫がまたたくさんまいりましたね。どれでしょう、私の知人は」

と言いながらその猫を見つけた。非常に愛らしく思われて衛門督は手でなでていた。宮は、

「實際容きりよう貌ようのよい猫だね。けれど私には馴なつかないよ。人見知

りをする猫なのだね。しかし、これまで私の飼っている猫だつてたいしてこれには劣つていないよ」

とこの猫のことを仰せられた。

「猫は人を好ききらいなどあまりせぬものでございますが、しかし賢い猫にはそんな知恵があるかもしれませぬ」

などと衛門督は申して、また、

「これ以上のおおそばに幾つもいるのでございましたら、これはしばらく私にお預からせください」

こんなお願いをした。心の中では愚かしい行為をするものであるという気もしているのである。

結局衛門督<sup>えもんのかみ</sup>は望みどおりに女三の宮の猫を得ることができて、

夜などもそばへ寝させた。夜が明けると猫を愛撫するの<sup>あいぶ</sup>に時を費やす衛門督であつた。人馴<sup>な</sup>つきの悪い猫も衛門督にはよく馴れて、どうかすると着物の裾<sup>すそ</sup>へまつわりに来たり、身体<sup>からだ</sup>をこの人に寄せ、眠りに来たりするようになって、衛門督はこの猫を心からかわいがるようになった。物思いをしながら顔をながめ入っている横で、にようにようとかわいい声で鳴くのを撫<sup>な</sup>でながら、愛におごる小さき者よと衛門督はほほえまれた。

「恋ひわぶる人の形見と手ならせば汝<sup>なれ</sup>よ何とて鳴く音<sup>ね</sup>なるらん  
これも前生の約束なんだろうか」

顔を見ながらこう言うと、いよいよ猫は愛らしく鳴くのを懐ふとこ中ろに入れて衛門督は物思いをしていた。女房などは、

「おかしいことですね。にわかには猫を御寵ちようあい愛あいされるではありませんか。ああしたものには無関心だった方がね」

と不審がつてささやくのであった。東宮からお取りもどしの仰せがあつて、衛門督はお返しをしないのである。お預かりのものを取り込んで自身の友にしていた。

左大将夫人の玉たま鬘かずらの尚ないし侍のかみは真実の兄弟に対するよりも

右大将に多く兄弟の愛を持っていた。才気のあるはなやかな性質の人で、源大将の訪問を受ける時にも睦むつまじいふうに取り扱つて、昔のとおり親しく語つてくれるため、大将も淑景しげい舎しゃの方が羞し

ゆうち

恥を少なくして打ち解けようとする気持ちのないようなのに比べて、風変わりな兄弟愛の満足がこの人から得られるのであった。左大將は月日に添えて玉鬘を重んじていった。もう前夫人は断然離別してしまつて尚侍が唯一の夫人であつた。この夫人から生まれたのは男の子ばかりであるため、左大將はそれだけを物足らず思い、真木柱まきばしらの姫君を引き取つて手もとへ置きたがつているのであるが、祖父の式部卿しきぶきょうの宮が御同意をあそばさない。

「せめてこの姫君にだけは人から譏そしられない結婚を自分がさせてやりたい」

と言つておいでになる。帝みかどは御伯父おじのこの宮に深い御愛情をお持ちになつて、宮から奏上されることにお背そむきになることはおで

きにならないふうであった。もともからはなやかな御生活をしておいでになって、六条院、太政大臣家に続いての権勢の見える所で、世間の信望も得ておいでになった。左大将も第一人者たる将来が約束されている人であったから、式部卿の宮の御孫女、むすめ左大将の長女である姫君を人は重く見ているのである。求婚者がいろいろな人の手を通じて来てすでに多数に及んでいるが、宮はまだそれを婿にと選定されるふうもなかった。かれにその気があればと宮が心でお思いになる衛門督は猫ほどにも心を惹かぬのかままったくの知らず顔であった。左大将の前夫人は今も病的な、陰気な暮らしを続けて、若い貴女のために朗らかな雰囲気ふんいきを作ろうとする努力もしてくれないために、姫君は寂しがって、人づてに聞く継ままは

母はの生活ぶりにあこがれを持っていた。こうした明るい娘なの  
である。

ひょうぶぎょう

兵部卿の宮は今も御独身で、熱心にお望みになった相手は  
皆ほかへ取られておしまいになる結果になって、世間体も恥ずか  
しくお思になるのであつたが、この姫君に興味をお感じになり、  
縁談をお申し入れになると、式部卿の宮は、

「私はそう信じているのだ。大事に思う娘は宮仕えに出すことを  
第一として、続いては宮たちと結婚させることがいとね。普通  
の官吏と結婚させるのを頼もしいことのように思つて親たちが娘  
の幸福のためにそれを願うのは卑しい態度だ」

とお言いになつて、あまり求婚期間の悩みもおさせにならずに



御同意になった。兵部卿の宮はこの無造作な決まり方を物足らぬようにもお思いになったが、けいべつ軽蔑しがたい相手であつたから、  
ずるずる延ばしで話の解消をお待ちになることもおできにならないで、通つて行くようになつた。式部卿の宮はこの婿の宮を大事にあそばすのであつた。宮は幾人もの女によおう王をお持ちになつて、その宮仕え、結婚の結果によつて苦勞をされることの多かつたのに懲りておいでになるはずであるが、最愛の御孫女のためにまたこうした婿かきずきをお始めになつたのである。

「母親は時がたつにしたがつて病的な女になるし、父親はそちらの意志には従わない子だと言つてそまつに見ている姫君だからかわいそうでならぬ」

などとお言いになつて、新夫婦の居間の裝飾まで御自身で手を下してなされたり、またお指<sup>さし</sup>図<sup>ず</sup>をされたりもするのであつた。兵部卿の宮はお亡<sup>な</sup>くしになつた先夫人をばかり恋しがつておいでになつて、その人に似た新婦を得たいと願つておいでになつたために、この姫君を、悪くはないが似た所がないと御覧になつたせいか、通つておいでになるのにおつくうなふうをお見せになつた。式部卿の宮は失望あそばした。病人である母君も気分<sup>なげ</sup>の常態になつている時にはこの娘の思うようでない結婚を歎<sup>なげ</sup>いて、いよいよ人生をいやなものにきめてしまった。父親の左大将もこの話を聞いて、自分のあやぶんだとおりの結果になつたではないか、多情者の宮様であるからと思つて、初めから自分が賛成しなかつた婿

であつたから困つたことであると歎いていた。玉たま鬢かづら夫人は宮  
 のお情けの薄さを継ままむすめ娘の不幸として聞いていながら、自分が  
 もし結婚をしてそうした目にあつていたなら、六条院の人々へも、  
 実父の家族へも不名誉なことになるのであつたと思つた。そして  
 左大将の妻になつた運命を悲しむ気もなくなり、継娘に限りなく  
 同情した。その自分の処女時代にも兵部卿の宮を良人おととにしようと  
 は少しも思わなかつた。ただあれだけの情熱を運んでくださつた  
 方が、左大将と平凡な夫婦になつてしまつたことを軽蔑けいべつしてお  
 いでにならないかとそれ以来恥ずかしく思つていたのであると玉  
 鬢夫人は思い、その宮が継娘の婿におなりになつて、自分のこと  
 をどう聞いておいでになるであらうと思つたと晴れがましいような

気もするのであった。この夫人からも新婚した姫君の衣いし裳しょうその他の世話をした。前夫人がどう恨んでいるかというようなことは知らぬふうにして、長男、次男を中にして好意を寄せる尚ないし侍のかみに前夫人は友情をすら覚えているのであるが、式部卿の宮家には大夫人という性質の曲がった人が一人いて、この人は常にだれのこととも憎んで、罵言ばげんをやめないのである。

「親王がたというものは一人だけの奥さんを大事になさるといふことで、派手はでな生活のできない補いにもなろうというものだけに」と陰かげぐち口くちをするのが兵部卿の宮のお耳にはいった時、不愉快なことを聞く、自分に最愛の妻があつた時代にも他との恋愛の遊戯はやめなかつた自分も、こうまではひどい恨み言葉は聞かないで

いたとお思いになつて、いつそう亡なき夫人を恋しく思おぼしめ召めすことばかりがつのつて、自邸で寂しく物思ものいをしておいでになる日が多かつた。そうはいうものの二年もその状態で続いて来た今では、ただそれだけの淡い関係の夫婦として済んで行つた。

歳としつき月つきが重なり、帝みかどが即位をあそばされてから十八年になつた。

「将来の天子になる子のないことで自分には人生が寂しい。せめて気楽な身の上になつて自分の愛する人たちと始終出逢うこともできるようにして、私人として楽しい生活がしてみたい」

以前からよくこう帝は仰せられたのであつたが、重く御病氣をあそばされた時ににわかに讓位を行なわせられた。世人は盛りの御代みよをお捨てあそばされることを残念がつて歎なげいたが、東宮もも

う大人おとなになつておいでになつたから、お変わりになつても特別變  
わつたこともなかつた。ゆるぎない大御代おおみよと見えた。太政大臣は  
関白職の辞表を出して自邸を出なかつた。

「人生の頼みがたさから賢明な帝王みくらひさえ御位みくらひをお去りになるの  
であるから、老境に達した自分が挂冠けいかんするのに惜しい気持ちな  
どは少しもない」

と言つていたに違ひない。左大将が右大臣になつて関白の仕事  
もした。御母君の女御によごは新帝の御代を待たずに亡なくなつていたか  
ら、后きさきの位にお上のぼされになつても、それはもう物の背面のことに  
なつて寂しく見えた。六条の女御のお生みした今上第一の皇子が  
東宮におなりになつた。そうなるはずのことはだれも知つていた

が、目前にそれが現われてみればまた一家の幸福さに驚きもされるのであった。右大將が大納言を兼ねて順序のままに左大將に移り、この人も幸福に見えた。六条院は御讓位になった冷泉院れいぜいに御後嗣こうしのないのを御心の中では遺憾に思おぼしめ召された。実は新東宮だつて六条院の御血統なのだが、冷泉院の御在位中には御煩悶はんもんもなく過ごごされたほど、例の密通の秘密は隠しおおされたが、そのかわりにこの御系統が末まで続かぬように運命づけられておしまいになつたのを六条院は寂しくお思いになつたが、御口外あそばすことでもないののでただお心で味けなくお感じになるだけであつた。東宮の御母女御は皇子たちが多くお生まれになつて帝みかどの御寵ちようちゆうはますます深くなるばかりであつた。またも王氏の人が后に

お立ちになることになって、今度で三代にもなつていたから何かと飽き足らぬらしい世論があるのをお知りになつた時、冷泉院のちゆうぐう中宮は以前もこうした場合に六条院の強い御支持があつて、自分の後の位は定きまつたのであると過去を回想あそばしますます院の恩をお感じになつた。

冷泉院の帝は御期待あそばされたとおりに、御窮屈なお思いもなしに御幸みゆきなどもおできになることになつて、あちらこちらと御遊幸あそばされて、今日の御境遇ほどお楽しいものはないようにお見受けされるのであつた。帝は六条院においでになる御妹の姫宮に深い関心をお持ちになつたし、世間がその方に払う尊敬も大きいのであるが、なお紫夫人以上の夫人として六条院の御寵を受



けておいでになるのではなかった。年月のたつにしたがつて女王と宮の御中にこまやかな友情が生じて、六条院の中は理想的な穏やかな空気に満たされているが、紫夫人は、

「もう私はこうした出入りの多い住居すまいから退きまして、静かな信仰生活がしたいと思います。人生とはこんなものということも経験してしまつたような年齢としにもなつているのですもの、もう尼になることを許してくださいませんか」

と、時々まじめに院へお話するのであるが、

「もつてのほかですよ。そんな恨めしいことをあなたは思うのですか。それは私自身が実行したいことなのだが、あなたがあとに残つて寂しく思つたり、私といつしよにいる時と違つた世間の態

度を悲しく感じたりすることになってはという気がかりがあるために現状のままではいけないのですよ。それでもいつか私の実行の日が来るでしょう、あなたはそのあとのことになさい」

などとばかり院はお言いになって、夫人の志を妨げておいでになつた。女御は今も女王を真実の母として敬愛していて、明石夫人は隠れた女御の後見をするだけの人になって謙遜けんそんさを失わな  
いでいることは、かえつて将来のために頼もしく思われた。尼君  
もうれし泣きの涙を流す日が多くて、目もふきただれて幸福な老  
婆の見本になっていた。

すみよし住吉の神への願果たしを思い立つて参詣さんけいする女御は、以前  
に入道から送つて来てあつた箱をあけて、神へ約した条件を調べ

てみたが、それにはかなり大がかりなことを多く書き立ててあった。年々の春秋の神楽かぐらとともに必ず長久隆運の祈りをする事などは、今日の女御の境遇になつていなければ実行のできぬことであつた。ただ走り書きにした文章にも入道の學問と素養が見え、仏も神も聞き入れるであろうことが明らかに知られた。どうしてそんな世捨て人の心にこんな望みの楼閣が建てられたのであらうと、子孫への愛の深さが思われもし、神や仏に済まぬ氣もされた。並みの人ではなくてしばらく自分の祖父になつてこの世へ姿を現わしただけの、功德を積んだ昔の聖僧ではなかつたかなどと思われ、女御に明石あかしの入道を畏敬いけいする心が起こつた。今度はまだ女御の行なうことにはせず、六条院の参詣におつれになる形式で京

を立つたのであつた。

須磨<sup>すま</sup>明石時代に神へお約しになつたことは次々に果たされたのであるが、その以後もまた長く幸運が続き、一門子孫の繁栄を御覧になることによつても神の冥<sup>めい</sup>助<sup>じよ</sup>は忘れずに六条院は紫の女<sup>に</sup>王<sup>よおう</sup>も伴つて御参詣あそばされるのであつて、はなやかな一行である。簡素を旨として国の煩いになることはお避けになつたのであるが、この御身分であつてはある所までは必ず備えられねばならぬ旅の形式があつて、自然に大きなことにもなつた。公卿<sup>こうけい</sup>も二人の大臣以外は全部<sup>ぐぶ</sup>供奉した。神前の舞い人は各衛府<sup>えふ</sup>の次將たちの中の容貌<sup>ようぼう</sup>のよいのを、さらに背丈<sup>せたく</sup>をそろえてとられたのであつた。落選して歎<sup>なげ</sup>く風流公子もあつた。奏樂者も石清水<sup>いwashimizu</sup>や賀茂<sup>かも</sup>

の臨時祭に使われる専門家がより整えられたのであるが、ほかから二人加えられたのは近衛府このえふの中で音楽の上手じょうずとして有名になつてゐる人であつた。また神樂のほうを受け持つ人も多数に行つた。宮中、院、東宮の殿上役人が皆御命令によつて供奉ぐぶの中に入るのも無数にあつた。華奢かしやを尽くした高官たちの馬、鞍くら、馬添みい侍、隨身、小侍の服装までもきらびやかな行列であつた。院の御み車くるまには紫夫人と女御をいっしょに乗せておいでになつて、次の車には明石夫人とその母の尼とが目だたぬふうに乗つていた。それには古い知り合いの女御めのとの乳母が陪乗したのである。女房たちの車は夫人付きの者ののが五台、女御のが五台、明石夫人に属したのが三台で、それぞれに違つた派手はでな味のある飾りと服装が人目

に立った。明石の尼君がいつしよに來たのは、

「今度の参詣に尼君を優遇して同伴しよう。老人の心に満足ができるほどにして」

と院がお言い出しになつたのであつて、はじめ明石夫人は、

「今度は院と女王様が主になつての御参詣なんですから、あなたなどが混じつておいでになつては私の立場も苦しくなりますからね、女御さんがもう一段御出世をなすつたあとで、その時に私たちだけでお参りをいたしましょう」

と言つて、尼君をとどめていたのであるが、老人はそれまで長命で生きておられる自信もなく心細がつてそつと一行に加わつて來たのである。運命の寵児ちようじであることがしかるべきことと思わ

れる女王や女御よりも、明石の母と娘の前生の善果がこの日ほどあざやかに見えたこともなかった。

十月の二十日はつかのことであつたから、中の忌垣いがきに這う葛くずの葉も色づく時で、松原の下の雑木の紅葉もみじが美しく波の音だけ秋であるともいわれない浜のながめであつた。本格的な支那樂しな高麗樂こうらいよりも東遊あずまびの音樂のほうがこんな時にはびつたりと、人の心にも波の音にも合っているようであつた。高い梢こずえで鳴る松風の下で吹く笛の音もほかの場所で聞く音とは変わって身にしみ、松風が琴に合わせる拍子は鼓を打つてするよりも柔らかでそして寂しくおもしろかつた。伶人れいじんの着けた小忌衣おみころも竹の模様と松の緑が混じり、挿頭かざしの造花は秋の草花といつしよになつたように見えるが、

「求もとの子めこ」の曲が終わりに近づいた時に、若い高官たちが正装の袍ほうの肩を脱いで舞の場へ加わった。黒の上着の下から臙脂えんじ、紅紫こうしの下した襲がさねの袖そでをにわかに出し、それからまた下の袖あこめの赤あかい袂たもとの見えるそれらの人の姿を通り雨が少しぬらした時には、松原であることも忘れて紅葉のいろいろが散りかかるように思われた。その派手はでな姿に白くほおけた荻おぎの穂ほを挿さしてほんの舞ひとふしの一節ひとふしだけを見せてはいったのがきわめておもしろかった。

院は昔を追憶しておいでになった。中途で不幸な日のあったことも目の前のことのように思われて、それについては語る人もお持ちにならぬ院は、関白を退いた太政大臣を恋おぼしめしく思おぼしめ召めされた。車へお帰りになった院は第二の車へ、



たれかまた心を知りて住吉すみやしの神代を經たる松にこと問ふ

という歌を懐中紙ふところがみに書いたのを持たせておやりになった。尼君は心を打たれたように萎しおれてしまった。今日のはなやかな光景を見るにつけても、明石を源氏のお立ちになつたころの歎なげかわしかつたこと、女御が幼児であつたころにした悲しい思いが追想されて、運命に恵まれていることを知つた。そしてまた山へはいつた良人おととも恋しく思われて涙のこぼれる気持ちをおさえて、

住すみの江を生けるかひある渚なぎさとは年ふるあまも今日や知るらん

と書いた。お返事がおそくなつては見苦しいと思い、感じたままの歌をもつてしたのである。

昔こそ先づま忘れね住吉の神のしるしを見るにつけても

とまたひとりごと独言もしていた。一行は終夜を歌舞に明かしたので

ある。二十日はつかの月の明りではるかに白く海が見え渡り、霜が厚く置いて松原の昨日とは変わった色にも寒さが感じられて、快く身にしむ社前の朝ぼらけであつた。自邸での遊びには馴なれていても、あまり外の見物に出ることを好まなかつた紫の女王は京の外の旅もはじめての経験であつたし、すべてのことが興味深く思われた。

住の江の松に夜深く置く霜は神の懸けたる木綿かづらかも

紫夫人の作である。 おののたかむら 小野篁の「比良の山さへ」と歌った雪

の朝を思つて見ると、奉つた祭りを神が嘉納された証の霜とも思  
われて頼もしいのであつた。

にょご 女御、

かんびと 神人の手に取り持たる さかきば 榊葉に ゆふ 木綿かけ添ふる深き夜の霜

なかつかさ 中務の君、

祝はふりこ子が木綿ゆふうち紛まひ置おく霜しもは実げにいちじるき神かみのしるしか

そのほかの人々からも多くの歌は詠よまれたが、書いておく必要がないと思つて筆者は省いた。こんな場合の歌は文学者らしくしている男の人たちの作も、平生よりできの悪いのが普通で、松の千歳ちとせから解放されて心の琴線ことづなに触れるようなものはないからである。

朝の光がさし上るころにいよいよ霜は深くなって、夜通し飲んだ酒のために神楽かぐらの面おもてのようになった自身の顔も知らずに、もうかがりび篝か火も消えかかっている社前で、まだ万歳万歳さかさきと櫛かみを振ふつて祝

い合っている。この祝福は必ず院の御一族の上に形となつて現われるであろうとますますはなばなしく未来が想像されるのであつた。非常におもしろくて千夜の時のあれと望まれた一夜がむぞうさに明けていったのを見て、若い人たちは渚なぎさの帰る波のようになつて置かれた車の、垂たれ絹の風に開く中から見える女衣装は花の錦にしきを松原に張つたようであつたが、男の人たちの位階によつて変わった色の正装をして、美しい膳部を院の御車みくるまへ運び続けるのが布衣ほいたちには非常にうらやましく見られた。明石の尼君の分も浅香おしきの折敷にびに鈍色の紙を敷いて精進物で、院の御家族並みに運ばれるのを見ては、

「すばらしい運を持った女というものだね」

などと彼らは仲間で言い合つた。おいでになつた時は神前へさ  
さげられる、持ち運びの面倒な物を守る人数も多くて、途中の見  
物も十分におできにならなかつたのであつたが、帰途は自由なお  
もしろい旅をされた。この楽しい旅行に山へはいりきりになつた  
入道をあずか与らせることのできなかつたことを院は物足らず思召され  
たが、それまでは無理なことであろう。実際老入道がこの一行に  
加わっているとしたら見苦しいことではなかつたであらうか。その  
人の思い上がった空想がことごとく実現されたのであるから、だ  
れも心は高く持つべきであると教訓をされたようである。いろい  
ろな話題になつて明石の人たちがうらやまれ、幸福な人のことを

明石の尼君という言葉もはやつた。太政大臣家の近江おうみの君は双すごろ六くの勝負さいの賽さいを振る前には、

「明石あかしの尼様、明石の尼様」

と呪文じゆもんを唱えた。

法皇は仏勤めに精進あそばされて、政治のことなどには何の干渉もあそばさない。春秋みゆきの行幸をお迎えになる時にだけ昔の御生みや活かがお心の上に姿を現わすこともあるのであつた。女にょさん二にの宮みやをおぼしめ思おぼしめ召めされて、六条院は形式上の保護者と見て、内部からの保護を帝みかどにお託しになつた。それで女三にほんの宮は二品にほんの位いにお上げられになつて、得させられる封戸ふこの数も多くなり、いよいよはなやかなお身の上になつたわけである。紫夫人は一方の

夫人の宮がこんなふうにならぬうちに年月に添えて勢力の増大していくのに対して、自分はただ院の御愛情だけを力にして今の所は負け目がな  
いとしても、そのお志というものも遂には衰えるであろう、そう  
した寂しい時にあわないうちに今のうちに善処したいとは常に思っ  
ていることであつたが、あまりに賢がるふうに思われてはという  
遠慮をして口へたびたびは出さないのである。院は法皇だけでな  
く帝までが関心をお持ちになるといふことがおそれおおく思召さ  
れて、冷淡にする噂うわさを立てさすまいというお心から、今ではあち  
らへおいでになることと、こちらにおられることとがちようど半  
々ほどになつていた。道理なこととは思ひながらもかねて思つた  
とおりの寂しい日の来始めたことに女によおう王は悲しまれたが、表面



は冷静に以前のとおりにしていた。東宮に次いでお生まれになつた女一の宮を紫夫人は手もとへお置きしてお育て申し上げていた。そのお世話の楽しさに院のお留守るすの夜の寂しさも慰められているのであつた。御孫の宮はどの方をも皆非常にかわいく夫人は思っているのである。花散里夫人は紫夫人も明石夫人も御孫宮がたのお世話に没頭しているのがうらやましくて、左大将のないしのすけ典侍に生ませた若君を懇望して手もとへ迎えたのを愛して育てていた。美しい子でりこうなこの孫君を院もおかわいがりになつた。院は御子の数が少ないように見られた方であるが、こうして広く繁栄する御孫たちによつて満足をしておいでになるようである。右大臣が院を尊敬して親しくお仕えすることは昔以上で、玉たまかざら鬘も

もう中年の夫人になり、何かの時には六条院へ訪ねて来て紫夫人にも逢つて話し合うほかにも親しみ深い往来が始終あつた。姫宮だけは今日もお少女のようなたよりなさで、また若々しさでおいでになつた。もう宮廷の人になりきってしまった女御に気づか  
いがなくおなりになつた院は、この姫宮を幼い娘のように思召して、この方の教育に力を傾けておいでになるのであつた。

朱雀院の法皇はもう御命数も少なくなつたように心細くばかり思召されるのであるが、この世のことなどはもう顧みないことにしたいとお考えになりながらも、女三の宮にだけはもう一度お逢いあそばされたかつた。このまま亡くなつて心の残るのはよろしくないことであるから、たいそうにはせず宮が訪ねておいでにな

ることをお言いやりになった。院も、

「ごもつともなことですよ。こんな仰せがなくともこちらから進んでお伺いをなさらなければならぬのに、ましてこうまでお待ちになっておられるのだから、実行しないではお気の毒ですよ」

とお言いになり、機会をどんなふうにして作ろうかと考えておいでになった。何でもなくそつと伺候をするようなことはみすぼらしくてよろしくない。法皇をお喜ばせかたがた外見の整ったことがさせたいとお思いになるのである。来年法皇は五十におなりになるのであったから、若菜の賀を姫宮から奉らせようかと院はお思いつきになって、それに付帯した法会ほうえの布施ふせにお出しになる法服したくの仕度をおさせになり、すべて精進でされる御宴会の用意で

あるから普通のことと変わって、苦心の払われることを今からお指図さしずになつていた。昔から音楽がことにお好きな方であつたから、舞の人、楽の人にすぐれたのを選定しようとしておいでになつた。右大臣家の下の二人の子、大将の子を典侍腹のも加えて三人、そのほかの御孫も七歳以上の皆殿上勤めをさせておいでになつた。それらと、兵部卿ひょうぶきょうの宮のまだ元服前の王子、そのほかの親王がたの子息、御親しんせき戚の子供たちを多く院はお選びになつた。殿上人たちの舞い手も容貌ようぼうがよくて芸のすぐれたのを選びととのえて多くの曲の用意ができた。非常な晴れな場合と思つてその人たちは稽古けいこを励むために師匠になる専門家たちは、舞のほうのも楽のほうのも繁忙をきわめていた。女三の宮は琴の稽古を御父の院

のお手もとでしておいでのになったのであるが、まだ少女時代に六条院へお移りになったために、どんなふうにもその芸はなつたかと法皇は不安に思召して、

「こちらへ来られた時に宮の琴の音が聞きたい。あの芸だけは仕上げたことと思うが」

と言つておいでになることが宮中へも聞こえて、

「そう言われるのは決して平凡なお手並みでない芸に違いない。一所懸命に法皇の所へ来てお弾ひきになるのを自分も聞きたいものだ」

などと仰せられたということがまた六条院へ伝わって来た。院は、

「今までも何かの場合に自分からも教えているが、質はすぐれて  
いるがまだたいした芸になつていないのを、何心なくお伺いされ  
た時に、ぜひ弾けと仰せになつた場合に、恥ずかしい結果を生む  
ことになつてはならない」

とお言いになつて、それから女三の宮に熱心な琴の教授をお始  
めになつた。変わったものを二、三曲、また大曲の長いのが四季  
の氣候によつて変わる音、寒い時と空気の暖かい時によつての弾  
き方を変えねばならぬことなどの特別な奥義をお教えになるので  
あつたが、初めはたよりないふうであつたものの、お心によくは  
いつてきて上手じょうずにおなりになつた。昼は人の出入りの物音の多  
さに妨げられて、絃いとを揺ゆすつたり、おさえて変わる音の繊細な味

を研究おさせになるのに不便なために、夜になってから静かに教  
うべきであるとお言いになって、女<sup>によおう</sup>王の了解をお求めになつて  
院はずつと宮の御殿のほうへお泊まりきりになり、朝夕のお稽古<sup>けいこ</sup>  
の世話をあそばされた。女御<sup>によひ</sup>にも女王にも琴はお教えにならな  
ったのであつたから、このお稽古の時に珍しい秘曲もお弾きにな  
るのであろうことを予期して、女御も得ることの困難なお暇<sup>いとま</sup>をよ  
うやくしばらく得て帰邸したのであつた。もう皇子を二人お持ち  
しているのであるが、また妊娠して五月ほどになつていたから、  
神事の多い季節は御遠慮したいと言つてお暇を願つて来たのであ  
る。

十一月が過ぎるともどるようにと宮中からの御催促が急である

のもさしおいて、このごろの樂の音のおもしろさに女御は六条院を去りがたいのであった。なぜ自分には教えていただけなかつたのかと院を恨めしくお思いもしていた。普通と変わって冬の月を最もお好みになる院は、雪のある月夜にふさわしい琴の曲をお弾きになつて、女房の中の樂才のあるのに他に樂器で合奏をさせたりして楽しんでおいでになつた。

年末などはことに對の女王が忙しくていつさいの心こころくば配りのほかに、女御、宮たちのための春の仕度したくに追われて、

「春ののどかな気分になつた夕方などにこの琴の音をよくお聞きしたい」

などと言つていたが年も変わった。



年の初めにまず帝みかどからのほなやかな御賀を法皇はお受けになることになっていて、差し合つてはよろしくないと院は思召し、少したった二月の十幾日のころと姫宮の奉られる賀の日をお定めきになり、楽の人、舞い手は始終六条院へ来てその下稽古を熱心にする日が多かつた。

「対の女王がいつもお聞きしたがっているあなたの琴と、その人たちの十三絃げんや琵琶びわを一度合奏する女ばかりの催しをしたい。現代の大家といつても私の家族たちの音楽に対する態度より純真なものを持っていませんよ。私はたいした音楽者ではないが、すべての芸に通じておきたいと思つて、少年の時から世間の専門家を師にしてつきもしたし、また貴族の中の音楽の大家たちにも教え

を乞<sup>こ</sup>うたものですが、特に尊敬すべき芸を持った人と思われるのはなかつた。その時代よりもまた現在では音楽をやる人の素質が悪くなつて、芸が浅薄になつていふと思う。琴などはまして稽古をする者がなくなつたということですからあなただけ弾ける人はあまりないでしょう」

と院がお言いになると、宮は無邪氣に微笑<sup>ほほえ</sup>んで、自分の芸がこんなにも認められるようになったかと喜んでおいでになつた。もう二十一、二でおありになるのであるが、幼稚な所が抜けないで、そして見たお姿だけは美しかった。

「長くお目にかからないでおいでになるのだから、大人になつてりつぱになつたと認めていただけるとしてお目にかからなけ

ればいけませんよ」

と事に触れて院は教えておいでになるのであつた。実際こうした良人おつとがおいでにならなければ外間のいろいろな噂うわさにさえされる方であつたかもしれないと女房たちは思つていた。

一月の二十日過ぎにはもうよほど春めいてぬるい微風そよかぜが吹き、六条院の庭の梅も盛りになつていった。そのほかの花も木も明日の約されたような力が見えて、杜もりは霞かすみ渡つていた。

「二月になつてからでは賀宴したくの仕度で混雑するであろうし、こちらだけですることもその時の下調べのように思われるのも不快だから、今のうちがよい、あちらで会をなさい」

と院はお言いになつて女王を寢殿のほうへお誘いになつた。供

をしたいという希望者は多かつたが、寢殿の人と知り合いになつ  
 ている以外の人は残された。少し年はいつている人たちであるが  
 りつぱな女房たちだけが夫人に添って行つた。童女は顔のいい子  
 が四人ついて行つた。朱色の上に桜の色の汗かきみ衿を着せ、下には薄  
 色の厚織あこめの袖、浮き模様のある表袴おもてばかま、肌はだには槌つちの打ち目のき  
 れいなのをつけさせ、身の姿とりなし態も優美なのが選ばれたわけであ  
 った。女御の座敷のほうも春の新しい裝飾がしわたされてあつて、  
 華奢かしやを尽くした女房たちの姿はめざましいものであつた。童女は  
 臙脂えんじの色の汗かきみ衿に、支那綾しなあやの表袴おもてばかまで、袖あこめは山やまぶき吹色ふきいろの支那錦にしきのそ  
 ろいの姿であつた。明石夫人の童女は目だたせないような服装を  
 させて、紅梅色を着た者が二人、桜の色が二人で、下は皆青色を

濃淡にした袖で、これも打ち目のでき上がりのよいものを下につ  
 けさせてあつた。姫宮のほうでも女御や夫人たちの集まる日であ  
 ったから、童女の服装はことによくさせてお置きになつた。青丹<sup>あおに</sup>  
 の色の服に、柳の色の汗衫<sup>かざみ</sup>で、赤紫<sup>あこめ</sup>の袖などは普通の好みであつ  
 たが、なんとなく気高<sup>けだか</sup>く感ぜられることは疑いもなかつた。縁側  
 に近い座敷の襖<sup>からかみ</sup>子<sup>こ</sup>をはずして、貴女たちの席は几帳<sup>きちよう</sup>を隔てに  
 してあつた。中央の室には院の御座<sup>おんざ</sup>が作られてある。今日の拍子  
 合わせの笛の役には子供を呼ぼうとお言いになつて、右大臣家の  
 三男<sup>たまたか</sup>で玉鬘<sup>たまかざら</sup>夫人の生んだ上のほうの子が笙<sup>しょう</sup>の役をして、左大  
 将の長男に横笛の役を命じ縁側へ置かれてあつた。演奏者の茵<sup>しとね</sup>  
 皆敷かれて、その席へ院の御秘蔵の楽器が紺<sup>こんにしき</sup>錦<sup>にしき</sup>の袋などから

出されて配られた。明石夫人は琵琶、紫の女王には和琴、女御は箏そうの十三絃げんである。宮はまだ名楽器などはお扱いにくいであろうと、平生弾いておいでになるので調子を院がお弾き試みになったのをお配らせになった。院は、

「箏そうの琴は絃がゆるむわけではないが、他の楽器と合わせる時に琴柱ことじの場所が動きやすいものなのだから、初めからその心得でいなければならぬが、女の力では十分締めることがむずかしいであらうから、やはりこれは大将に頼まなければなるまい。それに拍子を受け持っている少年たちもあまり小さくて信用のできない点もあるから」

とお笑いになりながら、

「大将にこちらへ」

とお呼び出しになるのを聞いて、夫人たちは恥ずかしく思っていた。明石夫人以外は皆院の御弟子なのであるから、院も大将が聞いて難のないようにとできればえを祈っておいになった。女御は平生から陛下の前で他の人と合奏も仕馴なれているからだいじょうぶ落ち着いた演奏はできるであろうが、和琴というものはむずかしい物でなく、きまったことがないだけ創作的の才が必要なのを、女の弾き手はもてあましはせぬか、春の絃楽は皆しっくり他に合ってゆかねばならぬものであるが、和琴がうまくいっしょになつてゆかねようなことはないかとも損な弾き手に同情もしておいでになった。

左大将は晴れがましくて、音楽会のいかなる場合に立ち合うよりも氣のつかわれるふうで、きれいな直衣のうしを薰たきもの香の香の香の香のよく染しんだ衣服に重ねて、なおも袖そでをたきしめることを忘れずに整った身姿みなりのこの人が現われて来たころはもう日が暮れていた。感じのよい早春の黄たそがれ昏たそがれの空の下に梅の花は旧年に見た雪ほどたわやかに咲いていた。ゆるやかな風の通り通うごとに御簾みすの中の薰たきもの香の香の香の香の匂においを助けるように吹き迷うぐいすつて鶯うぐいすを誘うかと思えた。御簾みすの下ののほうから箏そうの琴ことのさきのほうを少しお出しになつて、院いんが、

「失礼だがこの絃いとの締まりぐあいをよく見て調音をしてほしい。他人に来てもらうことのできない場合だから」



とお言いになると、大將はうやうやしく琴を受け取って、一いっこ越調つの音ねに発はつの絃いとの標準じの柱はしらを置き全体を弾き試みることはせずいにそのまま返そうとするのを院は御覧ごらんになつて、

「調子をつけるだけの一弾ひとひらきは氣どらずにすべきだよ」  
と院がお言いになつた。

「今日の会に私がいささかでも音を混ぜますようないそれた自信しんぴんは持っておりません」

大將は遠慮えんりょしてこう言う。

「もつともだけれども、女だけの音楽に引きさがつた、逃げたとい言われるのは不名誉ふめいだろう」

院はお笑いになつた。で大將は調子をかき合せて、それだけ

で御簾の中へ入れた。院の御孫にあたる小さい人たちが美しい直の  
衣姿うしをして吹き合わせる笛の音はまだ幼稚ではあるが、有望な未  
来の思われる響きであった。かき合わせが済んでいよいよ合奏に  
なったが、どれもおもしろく思われた中に、琵琶びわはすぐれた名手  
であることが思われ、神さびた撥ぼち使いで澄み切った音をたててい  
た。大将は和琴に特別な関心を持っていたが、それはなつかしい、  
柔らかな、愛嬌あいきようのある爪音つまおとで、逆にかく時の音が珍しくは  
なやかで、大家のもったいらしくして弾くのに少しも劣らない派は  
手でな音は、和琴にもこうした弾き方があるかと大将の心は驚かさ  
れた。深く精進を積んだ跡がよく現われたことによつて院は安心  
をあそばされて夫人をうれしくお思いになった。十三絃の琴は他

の楽器の音の合い間合い間に繊細な響きをもたらすのが特色であつて、女御の爪つまもと音はその中にもきわめて美しく艶えんに聞こえた。琴は他に比べては洗練の足らぬ芸と思われたが、お若い稽古けいこ盛りの年ごろの方であつたから、確かな弾き方はされて、ほかの楽器と交響する音もよくて、上達されたものであると大将も思つた。この人が拍子を取つて歌を歌つた。院も時々扇を鳴らしてお加えになるお声が昔よりもまたおもしろく思われた。少し無技巧的におなりになつたようである。大将も美音の人で、夜のふけてゆくにしたがつて音楽三昧さんまいの境地が作られていった。月がややおそく出るころであつたから、燈籠とうろうが庭のそここにもされた。院が宮の席をおのぞきになると、人よりも小柄なお姿は衣服だけ

が美しく重なっているように見えた。はなやかなお顔ではなくて、ただ貴族らしいお美しさが備わり、二月二十日ごろの柳の枝がわずかな芽の緑を見せているようで、鶯うぐいすの羽風にも乱れていくかと思われた。桜の色の細長を着ておいでになるのであるが、髪は右からも左からもこぼれかかってそれも柳の糸のようである。これこそ最上の女の姿というものであろうと院はおながめになるのであったが、女御には同じような艶えんな姿に今一段光る美の添って見える所があつて、身のとりなしに気品のあるのは、咲きこぼれた藤ふじの花が春から夏に続いて咲いているころの、他に並ぶものない優越した朝ぼらけの趣であると院は御覧になった。この人は身ごもつていて、それがもうかなり月に重なつて悩ましいところで

あつたから、済んだあとでは琴を前へ押しやつて苦しそうに脇きよう  
そく息へよりかかつているのであるが、背の高くない身体からだを少し伸  
 ばすようにして、普通の大きさの脇息へ寄つてるのが氣の毒で、  
 低いのを作り与えたい氣もされて憐あわれまれた。紅梅の上着の上には  
 らはらと髪のかかつた灯ほかげの姿の美しい横に、紫夫人が見えた。  
 これは紅紫かと思われる濃い色の小こうちぎ桂けいに薄えんじ臙脂えんじの細長を重ねた  
すそ裾すそに余つてゆるやかにたまつた髪がみごとで、大きさもいい加減  
 な姿で、あたりがこの人の美から放射される光で満ちているよう  
によおうな女にょ王おうは、花にたとえて桜といつてもまだあたらなほどの容  
 色なのである。こんな人たちの中に混じつて明石夫人は当然見劣  
 りするはずであるが、そうとも思われぬだけの美容のある人で、

聡明そうめいらしい品のよさが見えた。柳の色の厚織物の細長に下へ萌も  
 葱えぎかと思われる小桂こうちぎを着て、薄物の簡単な裳もをつけて卑下した  
 姿も感じがよくて侮あなずらわしくは少しも見えなかつた。青地の高こ  
 麗錦まにしきの縁ふちを取った敷き物の中央にもすわらずに琵琶びわを抱いて、  
 きれいに持った撥ばちの尖さきを絃いとの上に置いているのは、音を聞く以上  
 に美しい感じの受けられることであつて、五月さつきの橘たちばなの花も実もつ  
 いた折り枝けいが思われた。いずれもつつましくしているらしい内の  
 ものの気配けはいに大将の心は惹ひかれるばかりであつた。紫の女王の美  
 は昔の野分のわきの夕べよりもさらに加わっているに違ちがひないと思うと、  
 ただその一事だけで胸がとどろきやまない。女にょさん三みやの宮みやに対して  
 は運命が今少し自分に親切であつたなら、自身のものとしてこの

方を見ることのできたのであつたと思うと、自身の臆おくびよう病びようさも口惜くちおしかつた。朱雀院すざくゐんからはたびたびそのお気持ちを示され、それとなく仰せになつたこともあつたのであるがと思ひながらも、よく隙すきの見えることを知つては女王に惹かれたほど心は動きもしないのであつた。女王とはだれも想像ができぬほど遠い間隔のある所に置かれてゐる大將は、その忘れがたい感情などは別として、せめて自分の持つ好意だけでも紫の女王に認めてもらうだけ望んでできないのを考えては煩悶はんもんしてゐるのである。あるまじい心などはいだいていない、その思いを抑制することはできない人である。

夜がふけてゆくらしい冷ややかさが風に感ぜられて臥待ふしまちづき月が

上り始めた。

「たよりのない春の朧おぼろ月夜だ。秋のよさというのもまたこうした夜の音楽と虫の音がいつしよに立ち上ってゆく時にあるものだね」

と院は大将に向かってお言いになった。

「秋の明るい月夜には、音楽でも何の響きでも澄み通って聞こえますが、あまりきれいに作り合わせたような空とか、草花の露の色とかは、専念に深く音楽を味わわせなくなる気もいたします。

やはり春のたよりのない雲の間から朧な月が出ますほどの夜に、静かな笛の音などの上ってゆくのを聞きますほうが、音楽そのものを樂しむのにはよいかと思われます。女は春を憐あわれむという言葉がございませうがもつともなことを思われます。すべてのものの調子



がしつくり合うのは春の夕方に限るようには考えられませんが」

と大将が言うのと、

「それは断定的には言えないことだ。古人でさえ決めかねたことなのだから、末世のわれわれの力で正しい批判のできるわけもない。ただ音楽のほうでは秋の律の曲を、春の呂りよの曲の下に置かれていることだけは今君が言ったような理由があるからだろう」

院はこう仰せられた。また、

「どう思うかね。現在の優秀な音楽家とされている人たちの、宮中などのお催しなどの場合に演奏を命ぜられる人のきを聴いても名人だと思われるのは少なくなつたようだが、先輩についてよく研究をしようとするような熱心が足りないのかね。今日のような女

ばかりの音楽の会に交じっても、格別きわだつと思われる人があ  
るようにも思われない。しかしそれは近年の私がどこへも行かず  
に一所に引きこもっていて、鑑識が悪く偏ってしまったのかもし  
れないが、とにかく感激を覚えさせられる音楽者のいないのは残  
念だ。どんな芸事も演ぜられる場所によつては平生と違つたでき  
ばえを見せるものであるが、最も晴れの場所の宮中でのこのごろ  
の音楽の遊びに選り出される人たちに、この女性たちのを比べて  
劣つていると思う点があるかね」

「それを申し上げたいと思つたのでございますが、しかし頭の悪  
い私はでたらめを申すことになるかもしれません。今の世間の者  
は昔の音楽の盛んな時を知らないからでもありますかえもんのかみ衛門督の

和琴、ひょうぶぎょう兵部卿の宮様の琵琶びわなどを激賞いたします。私どもも  
妙技とはしておりますが、今晚の皆様の御演奏には驚愕きょうがくいたしました。  
はじめはたいしたお遊びでもあるまいと軽く考えてい  
たためにいつそう感激が大きいのでございましょうか。歌の役は  
まことに気がさして勤めにくうございました。和琴は太政大臣に  
よってだけすべての楽音を率いるような巧妙な音のたつものと思  
っております、その境地へは一步も他の者がいれないもの  
と思われるむずかしい芸でございしますが、今晚のはまた特別な  
ものでございました。結構でした」

大將はほめた。

「そんな最大級の言葉でほめられるほどのものではないのだが」

得意な御微笑が院のお顔に現われた。

「私にはまずできそこねの弟子はないようだね。琵琶だけは私に骨を折らせた弟子でしの芸ではないがすぐれたものであったはずだ。

意外なところで私の発見した天性の弾き手なのだよ。ずいぶん感心したものだが、そのころよりはまた進歩したようだ」

こうして皆御自身の功にしてお言いになるのを聞いていて、女房たちなどは肱ひじを互いに突き合わせたりして笑っていた。

「すべての芸というものは習い始めると奥の深さがわかって、自分で満足のできるだけを習得することはとうていできないものなのだが、しかしそれだけの熱を芸に持つ人が今は少ないから、少しでも稽古けいこを積んだことに自身で満足して、それで済ませていく

のだが、琴というものだけはちよつと手がつけられないものなのだよ。この芸をきわめれば天地も動かすことができ、鬼神の心も柔らげ、悲境にいた者も楽しみを受け、貧しい人も出世ができて、富貴な身の上になり、世の中の尊敬を受けるようなことも例のあることなのだ。この芸の伝わった初めの間は、これを学ぶ人は皆長く外国へ行っていて、あらゆる困難に打ち勝つて、上達しようとしたものだが、そうまでして成功したものの数はわずかだったのだ。実際すぐれた琴の音は月や星の座を変えさせることもあったし、その時季でなしに霜や雪を降らせたり、黒雲が湧わき出したり、雷鳴がそのためにしたりしたことも昔はあったのだよ。だれも音楽のうちの最高のものと知っていても、完全にその芸を習い

おおせるものが少なかったし、末世にはなるし、今残っているのは昔のほんとうのものの断片だけの価値のものかとも思われる。それでもまだ鬼神が耳をとどめるものになっている琴の稽古けいこをなまじいにして、上達はできずにかえっていろいろな不幸な終わりを見たりする人があるものだから、琴の稽古をする者は不吉を招くというような迷信もできて、近ごろではこの面倒な芸を習う人が少なくなったということだね。遺憾なことだ。琴がなくては世の中の音楽が根本の音を持たないものになるのだからね。すべての物は衰えかけると早い速力で退化する一方なんだから、そんな中で一人の人間だけが熱心にその芸に志して、高麗こうらい、支那しなと渡り歩いて家族も何も顧みない者になってしまうのも狂的だから、

それほどはしないでも、この芸がどんなものであるかを知りうるだけのことを私はしたいと思つて、一曲でも十分に習いうることは困難なものとしても、これにはむずかしい無数の曲目のあるものなのだから、若くて音楽熱の盛んな年ごろの私は世の中にあるだけの琴の譜を調べたり、あちらから来ているものは皆手もとへ取り寄せて、それによつて研究をしたが、しまいには私以上の力のある先生というものもなくなつて不便だったものの、独学で勉強をしたが、それでも古人の芸に及ぶものでは少しもなかつたのだからね。ましてこれからは心細いものになるだろうとこの芸について私は悲しんでいる」

などと院のお語りになるのを聞いていて大将は自身をふがいな

く恥ずかしく思った。

「今<sup>きんじょう</sup> 上<sup>じょう</sup>の親王が御成人になれば、それまで生きていくかどうかおぼつかないことだが、その時に私の習いえただけの琴の芸をお授けしようと思つてゐる。二の宮は今からそうした天分を持たれるようだから」

このお言葉を明石夫人<sup>あかし</sup>は自身の名誉であるように涙ぐんで側<sup>かたえ</sup>聞<sup>き</sup>きをしていたのであつた。

女御は箏<sup>そう</sup>を紫夫人に譲つて、悩ましい身を横たえてしまったので、和琴<sup>わこん</sup>を院がお弾<sup>ひ</sup>きになることになつて、第二の合奏は柔らかい気分の派手<sup>はで</sup>なものになつて、催馬楽<sup>さいばら</sup>の葛城<sup>かつらぎ</sup>が歌われた。院が繰り返しの所々で声をお添えになるのが非常に全体を美しいもの



にした。月の高く上る時間になり、梅花の美もあざやかに  
きた。十三絃げんの箏そうの音は、女御のは可憐かれんで女らしく、母の明石夫  
人に似た揺ゆの音が深く澄んだ響きをたてたが、女王のはそれとは  
変わってゆるやかな気分が出て、聴きき手の心に酔いを覚えるほど  
の愛嬌あいぎようがあり、才のひらめきの添ったものであった。合奏の  
末段になって呂りよの調子になる所の搔かき合わせがいつせいには  
なやかになり、琴は五つの調べの中の五六の絃いとのはじき方をおも  
しろく宮はお弾きになって、少しも未熟と思われる点がなく、よ  
く澄んで聞こえた。春と秋その他のあらゆる場合に変化させねば  
ならぬ弾法の使いこなしようを院がお教えになったのを誤らずに  
よく会得して弾いておいでになるのに、院は誇りをお覚えになつ

た。小さい御孫たちが熱心に笛の役を勤めたのをかわいく院は思お召ほしめして、

「眠くなつただらうのに、今晚の合奏はそう長くしないはずでわずかな予定だったのがつい感興にまかせて長く続けていて、それも楽音で時間を知るほどの敏感がなく、思わずおそくなって、思いやりのないことをした」

とお言いになり、笙しやうの笛を吹いた子に酒杯をお差しになり、御服を脱いでお与えになるのであつた。横笛の子には紫夫人のほうから厚織物の細長に袴はかまなどを添えて、あまり目だたせぬ纏てんとう頭が出された。大将には姫宮の御簾みすの中から酒器かわらけが出されて、宮の御装束一そろいが纏頭にされた。

「変ですね。まず先生に御褒美ほうびをお出しにならないで。私は失望した」

院がこう冗じょうだん談をお言いになると、宮の几帳きちょうの下からお贈り物の笛が出た。院は笑いながらお受け取りになるのであったが、それは非常によい高麗笛であった。少しお吹きになると、もう退出し始めていた人たちの中で大将が立ちどまって、子息の持つていた横笛を取つてよい音に吹き合わせるのが、至芸と思われれるこの音を院はうれしくお聞きになり、これもまた自分の弟子でしであったと満足されたのであった。

大将は子供をいっしよに車へ乗せて月夜の道を帰つて行つたが、いつまでも第二回のおりの箏の音が耳についていて、遣やる瀬なく

恋しかつた。この人の妻は祖母の宮のお教えを受けていたといつても、まだよくも心にはいらぬうちに父の家へ引き取られ、十三絃もはんばな稽古けいこになつてしまつたのであるから、良人の前では恥じて少しも弾かないのである。すべておおまかに外見をかまわず暮らしていて、あとへあとへ生まれる子供の世話に追われているのであるから、大将は若い妻の感じのよさなどは少しも受け取りえない良人なのである。しかも嫉妬しつとはして、腹をたてなどする時に天真爛漫らんまんな所の見える無邪気な夫人なのであつた。

院は対のほうへお帰りになり、紫夫人はあとに残つて女三の宮とお話などをして、明け方に去つたが、昼近くなるまで寢室を出なかつた。

「宮は上手じょうずになられたようではありませんか。あの琴をどう聞きましたか」

と院は夫人へお話しかけになった。

「初めごろ、あちらでなさいますのを、聞いておりました時は、まだそうおできになるとは伺いませんでしたが、非常に御上達なさいましたね。ごもつともですわね、先生がそればかりに没頭していらつしやつたのですものね」

「そうですね、手を取りながら教えるのだからこんな確かな教授法はなかつたわけですね。あなたにも教えるつもりでいたが、あれは面倒で時間のかかる稽古ですからね、つい実行ができなかつたのだが、院の陛下も琴だけの稽古はさせているだろうと言つて

おられるということを知ると、お気の毒で、せめてそれくらいのことには保護者に選ばれたものの義務としてしなければならぬかという気になって、やり始めた先生なのですよ」

などと仰せられるついでに、

「小さかったころのあなたを手もとへ置いて、理想的に育て上げたいとは思ったものの、そのころの私にはひまな時間が少なく、特別なものの先生になってあげることでもできなかったし、近年はまたいろいろなおことが次から次へと私を駆使して、よく世話もしてあげなかつた琴のできのよかつたことで私は光栄を感じましたよ。大将が非常に感心しているのを見たこともうれしくてなりませんでしたよ」

ともおほめになった。そうした芸術的な能力も豊かである上に、今は一方で祖母の義務を御孫の宮たちのために忠実に尽くして、家庭の実務をとることに力不足は少しも見せない夫人であることを院はお思いになり、こうまで完全な人というものは短命に終わるようなこともあるのであると、そんな不安をお覚えになった。多くの女性を御覧になった院が、これほどにも物の整った人は断じてほかにないときめておいでになる紫の女王であった。夫人は今年が三十七であった。同棲どうせいあそばされてからの長い時間まを院は追懐あそばしながら、

「祈きと禱とうのようなことを半生の年よりもたくさんさせて今年は無理をしないようにあなたは慎むのですね。私がそうしたことは常に

気をつけてさせなければならぬのだが、ほかのことに紛れてう  
っかりとしている場合もあるだろうから、あなた自身で考えて、  
ああしたいというようないふ大きな仏事の催しでもあれば、  
言ってくればいくらでも用意をさせますよ。北山の僧都そうずがなく  
なっておしまひになつたことは惜しいことだ。親戚しんせきとせずに言  
つてもりっぱな宗教家でしたがね」

ともお言いになつた。また、

「私は生まれた初めからすでにたいそうに扱われる運命を持つて  
いたし、今日になつて得ている名誉も物質的のしあわせも珍しい  
ほどの人間ともいつてよいが、また一方ではだれよりも多くの悲  
しみを見て来た人とも言えるのです。母や祖母と早く別れたこと



に始まって、いろいろな悲しいことが私のまわりにはありましたよ。それが罪業を軽くしたことになって、こうして思いのほか長生きもできるのだと思いますよ。あなたは私とあの別居時代の<sup>はんもん</sup>がいが経験をしてからはもう物思いも煩悶もなかつたろうと思われる。お后きさぎと言われる人、ましてそれ以下の宮廷の人には人との競争意識でみずから苦しめない人はないのですよ。親の家にいるままのようにして今日まで来たあなたのような気楽はだれにもないものなのですよ。この点だけではあなたがだれよりも幸福だったということがわかりますか。思いがけなく姫宮をこちらへお迎えしなければならぬことになってからは、少しの不愉快はあるでしょうがね、それによって私の愛はいつそう深まっているのだ

が、あなたは自身のことだからわかっていないかもしれない。しかし物わがりのいい人だから理解していてくれるかもしれないと頼みにしていますよ」

と院がお言いになると、

「お言葉のように、ほかから見ますれば私としては過分な身の上になつているのですが、心には悲しみばかりがふえてまいります。それを少なくしていただきたいと神仏にはただそれを私は祈つているのですよ」

言いたいことをおさえてこれだけを言った女王に貴女らしい美しさが見えた。

「ほんとうは私はもう長く生きていられない気がしているのでご

ざいますよ。この厄年やくどしまでもまだ知らない顔でこのままでいますことは悪いことと知っています。以前からお願ひしていることですから、許していただけましたら尼になります」

とも夫人は言った。

「それはもつてのほかのことですよ。あなたが尼になつてしまつたあとの私の人生はどんなにつまらないものになるだろう。平凡に暮らしてはいるようなものの、あなたと睦むつまじくして生きていくということよりよいことはない。私は信じているのです。あなただけをどんなに私が愛しているかということ、これからの長い時間に見ようと思つてください」

院がこうお言いになるのを、またもいつもの慰め言葉で自分の

信仰にはいる道をおはばみになると聞いて、夫人の涙ぐんでいるのを院は憐れあわにお思いになつて、いろいろな話をし出して紛らせようとおつとめになるのであつた。

「そうおおぜいではありませんが、私の接触した比較的優秀な女性について言つてみると、女は何よりも性質が善良で落ち着いた考えのある人が一等だと思われるが、それがなかなか望んで見いだせないものなのですよ。大将の母とは少年時代に結婚をして、尊重すべき妻だとは思つていましたが、仲をよくすることができずに、隔てのあるままで終わったのを、今思うと気の毒で堪えられないし、残念なことをしたと後悔もしていながら、また自分だけが悪いのでもなかつたと一方では考えられもするのですよ。り

つばな貴婦人であつたことは間違ひのないことで、なんらの欠点  
はなかつたが、ただあまりに整然ととのつたのが堅い感じを受  
けさせてね。少し賢過ぎるといつていいような人で、話で聞けば  
頼もしいが、妻にしては面倒な氣のするとうような女性でした  
よ。中宮ちゆうぐうの母君の御息所みやすどころは、高い見識の備わつた才女の例  
には思い出される人だが、恋人としてはきわめて扱いにくい性格  
でしたよ。怨むうらのが当然だと一通りは思われることでも、その人  
はそのままそのことを忘れずに思いつめて深く恨むのですから、  
相手は苦しくてならなかつた。自己を高く評価させないではおか  
ないという自尊心が年じゆう付きまつわっているような氣がして、  
そんな場合に自分は氣に入らない男になるかもしれないと、あま

りに見栄を張り過ぎるような私になって、そして自然に遠のいて縁が絶えたのですよ。私が無二無三に進み寄つてあるまじい名の立つ結果を引き起こしたその人の真価を知っているだけなお捨てしまったのが済まないことに思われて、せめて中宮にはよくお尽くししたいと、それも前生の約束だったのでしようが、こうして子にしてお世話を申していることで、あの世からも私を見直しているでしょうよ。今も昔も浮わついた心から人のために気の毒な結果を生むことの多い私ですよ」

なお幾いくたり人かの女の上を院はお語りになつた。

「女御によぎのあの後見役はたいしたものではあるまいと軽く見てかかつた相手ですが、それが心の底の底までは見られないほどの深い

所のある女でしたからね。うわべは素直らしく柔順には見えながら、自己を守る堅さが何かの場合に見える<sup>れいり</sup>伶俐なたちなのですよ」と院がお言いになると、

「ほかの方は見ないのですからわかりませんけれど、あの方にはおりおりお目にかかっています、<sup>そうめい</sup>聡明で聡明で御自身の感情を少しもお見せにならないのに比べて、だれにも友情を押しつける私をあの方はどう御覧になっていらっしやるかときまりが悪くてね。しかしとにもかくにも女御は私をいいようにだけ解釈してくださいるだろうと思っています」

夫人にとってはねたましく思われた人であった<sup>あかし</sup>明石夫人をさえこんな寛大な心で見るとなると、女御を愛する心の深

いからであろうと院はうれしく思おほしめ召した。

「あなたは恨む心もある人だが思いやりもあるから私をそう困らせませんね。たくさんな女の中であなたの真ま似ねのできる人はない。あまりにりっぱ過ぎるわけですね」

微笑して院はこうお言いになる。

夕方になつてから、

「宮がよくお弾ひきになつたお祝いを言つてあげよう」

と言つて、院は寢殿へお出かけになつた。自分があるために苦しんでいる人がほかにあることなどは念頭になくて、お若々しく宮は琴の稽古けいこを夢中になつてしておいになつた。

「もう琴は休ませておやりなさい。それに先生をよく歓待なさら



なければならぬでしょう。苦しい骨折りのかいがあつて安心してよいできでしたよ」

と院はお言いになつて、楽器は押しやつて寝ておしまいになつた。

対のほうでは寢殿泊まりのこうした晩の習慣ならわしで女王によおうは長く起きていて女房たちに小説を読ませて聞いたりしていた。人生を写した小説の中にも多情な男、幾人も恋人を作る人を相手に持つて、絶えず煩悶はんもんする女が書かれてあつても、しまいには二人だけの落ち着いた生活が営まれることに皆なつているようであるが、自分はどうだろう、晩年になつてまで一人の妻にはなれずにいるではないか、院のお言葉のように自分は運命に恵まれているのか

もしれぬが、だれも最も堪えがたいこととする苦痛に一生付きま  
とわれていなければならぬのであろうか、情けないことであるな  
どと思ひ續けて、夫人は夜がふけてから寢室へはいったのである  
が、夜明け方から病になつて、はなはだしく胸が痛んだ。女房が  
心配して院へ申し上げようと言つているのを、

「そんなことをしては濟みませんよ」

と夫人はとめて、非常な苦痛を忍んで朝を待った。発熱までも  
して夫人の容体は悪いのであるが、院が早くお歸りにならないの  
をお促しすることもなしにいるうち、女御のほうから夫人へ手紙  
を持たせて来た使いに、病氣のことを女房が伝えたために、驚い  
た女御から院へお知らせをしたために、胸を騒がせながら院が歸

つておいでになると、夫人は苦しそうなふうで寝ていた。

「どんな気持ちですか」

とお言いになり、手を夜着の下に入れてごらんになると非常に夫人の身体からだは熱い。昨日話し合われた厄年のことも思われて、院は恐ろしく思召されるのであった。粥かゆなどを作つて持つて来たが夫人は見ることにすらもいやがった。院は終日病床にお付き添いになつて看護をしておいになつた。ちよつとした菓子なども口にせず起き上がらないまま幾日かたつた。どうなることかと院は御心配になつて祈祷きとうを数知らずお始めさせになつた。僧を呼び寄せて加持かじなどもさせておいになつた。どこが特に悪いともなく夫人は非常に苦しがるのである。胸の痛みの時々起こるおりなども

堪えがたそうな苦しみが見えた。いろいろな養ようじよう生せいもまじないもするがききめは見えない。重い病氣をしても時さえたてばなおる見込みのあるのは頼もしいが、この病人は心細くばかり見えるのを院は悲しがつておいでになった。もうほかのことをお考えになる余裕がないために、法皇の賀のことも中止の状態になった。法皇の御寺みでらからも夫人の病をねんごろにお見舞いになる御使いがたびたび来た。

夫人の病氣は同じ状態のまままで二月も終わつた。院は言い尽くせぬほどの心痛をしておいでになって、試みに場所を変えさせたらとお考えになつて、二条の院へ病女王をお移しになつた。六条院の人々は皆大厄やくなん難なんが来たように、悲しんでいる。冷泉れいぜい院も

御心痛あそばされた。この夫人にもしものことがあれば六条院は必ず出家を遂げられるであろうことは予想されることであつたら、大将なども誠心誠意夫人の病氣回復をはかるために奔走しているのであつた。院が仰せられる祈禱きとうのほかには大将は自身の志での祈禱もさせていた。少し知覚の働く時などに夫人は、

「お願いしていただきますことをあなたはこぼお拒みになるのですもの」

と、院をお恨みした。力の及ばぬ死別にあうことよりも、生きながら自分から遠く離れて行かせるようなことを見ては、片時も生きるに堪えない気があそばされる院は、

「昔から私のほうが出家のあこがれを多く持つていながら、あなたが取り残されて寂しく暮らすことを思うのは、堪えられないこ

となので、こうしてまだ俗世界に残っているのに、逆にあなたが私を捨てようと思うのですか」

こんなにはかりお言いになつて御同意をあそばされないのが悪いのか、夫人の病体は頼み少なく衰弱していった。もう臨終かと思われることも多いためにまた尼にさせようかとも院はお惑いになるのであつた。こんなことで女によさん三みやの宮みやのほうへは仮の訪問すらあそばされなかつた。どこでも楽器はしまい込まれて、六条院の人々は皆二条のほうへ集まつて行つた。このお邸やしきは火の消えたようであつた。ただ夫人たちだけが残っているのであるが、これを見れば六条院のはなやかさは紫の女王一人のために現出されていたことのように思われた。女御も二条の院のほうへ来て御父子

で看護をされた。

「あなたは普通のお身体からだでないのですから、物怪もののけの徘徊はいかいする私の病室などにはおいでにならないで、早く御所へお帰りなさいね」

と、病苦の中でも夫人は心配して言うのであった。若宮のおかわいらしいのを見ても夫人は非常に泣くのであった。

「大きくおなりになるのを拝見できないのが悲しい。お忘れになるでしょう」

などと言うのを聞く女御も悲しかった。

「そんな縁起でもないことを思つてはいけませんよ。悪いようでもそんなことにはならないだろうと思う自身の性格で運命も支配

していくことになりまますからね。狭い心を持つ者は出世をしても寛大な気持ちでいられないものだから失敗する。善良な、おおような人は自然に長命を得ることになる例もたくさんあるのだから、あなたなどにそんな悲しいことは起こってきませんよ」

などと院はお慰めになるのであった。神仏にも夫人の善良さ、罪の軽さを告げて目に見えぬ加護を祈らせておいでになるのである。修しゆほう法ほうをする阿闍梨あじやりたち、夜居よいの僧などは院の御心痛のはなはだしさを拝見することの心苦しさに一心をこめて皆祈った。少し快い日が間に五、六日あつて、また悪いというような容体で、幾月も夫人は病床を離れることができなかつたから、やはり助かりがたい命なのかと院はお歎なげきになつた。物もの怪のけで人に移されて



現われるものもない。どこが悪いということもなくて日に添えて夫人は衰弱していくのであったから、院は悲しくばかり思おぼしめ召されて、いつさいほかのことはお思いになれなかった。

あの衛門督えもんのかみは中納言になっていた。衛門督の官も兼ねたままである。当代の天子の御信任を受けてはなやかな勢力のついてくるにつけても、失恋の苦を忘れかねて、女三の宮の姉君の二の宮と結婚をした。これは低い更衣腹こういの内親王であつたから、心安い気がして格別の尊敬を妻に払う必要もないと思つて、院からお引き受けをしたのである。普通の人に比べてはすぐれた女性ではおありになつたが初めから心に沁しんだ人に変えるだけの愛情は衛門督に起こらなかつた。ただ人目に不都合でないだけの良人おととの義務

を尽くしているに過ぎないのであつた。今も以前の恋の続きにその方のことを聞き出す道具に使っている女三の宮の小侍従という女は、宮の侍従の乳母めのとの娘なのである。その乳母の姉が衛門督の乳母であつたから、この人は少年のころから宮のお噂うわさを聞いていた。お美しいこと、父帝が溺愛できあいしておいでになることなどを始終聞かされていたのがこの恋の萌芽きざしになつたのである。

六条院が病夫人と二条の院へお移りになつていて、ひまであるうことを思つて小侍従を衛門督は自邸へ迎えて、熱心に話すのはまたそのことについてであつた。

「昔から命にもかかわるほどの恋をしていて、しかも都合のよいあなたという手蔓てづるを持っていて、宮様の御様子も聞くことができ、

私の煩悶はんもんしていることも相当にお伝えしてもらっているはずなのだが、少しも見るに足る効果がないから残念でならない。あなたが恨めしくなるよ。法皇様さえも、宮様が幾人もの妻の中の一におなりになって、第一の愛妻はほかの方であるというわけで、一人お寝やすみになる夜が多く、つれづれに暮らしておいでになるのをお聞きになつて、御後悔をあそばしたふうで、結婚をさせるのであつたら普通人の忠実な良人おととを宮のために選ぶべきだつたと言いいになり、女二にょにの宮みやはかえつて幸福で将来が頼もしく見えるではないかと仰せられたということを私は聞いて、お氣の毒にも、残念にも思つて煩悶しないではいられないではないか。私の宮さんも御姉きょうだい妹ではあるが、それはそれだけの方としておくのだ

よ」

と衛門督えもんのかみが歎息たんそくをしてみせると、小侍従は、

「まあもつたいない。それはそれとしてお置きになって、また何をどうしようというのでしょうか」

ととがめた。衛門督は微笑を見せて、

「まあ世の中のことは皆そうしたもので、表も裏もあるものなのだよ。私が三の宮さんの熱心な求婚者であつたことは、法皇様も陛下もよく御承知で、陛下はその時代に十分見込みはありそうだよ、とも仰せられたもののだが、もう少しの御好意が不足していたわけだと私は思っている」

などと言う。

「それはだめですよ。むずかしいことですよ。運命もありますし、六条院様が求婚者になって現われておいでになつては、どの競争者だつて勝ち味はないと思いますけれど、あなただけはたいへんな御自信があつたのですね。近ごろになりましてこそ御官服の色が濃くおなりになつたようでございますがね」

こんなふうにかくし立てる小侍従の攻撃にはかなわなないことを衛門督は思つた。

「もう昔のことは言わないよ。ただね、このごろのようなまたもない好機会にせめてお居間の近くへまで行つて、私の苦しんでいゝる心を少しだけお話しさせてくれることを計らつてくれないか。もつたないよくねん欲念などは見ていてごらん、もういつさい起こさ

ないことにあきらめているのだから、いいだろう」

「それ以上のもつたいない欲心がありますかしら。恐ろしい望みをお起こしになったものですね、私は出てまいらなければよかったです」

強硬に小侍従は拒む。

「ひどいことを言うものではないよ。たいそうらしく何を言うのだ。后といっても恋愛問題をお起こしになった人もないわけではないよ。まして宮中のことではなしき、ほかからは結構なお身の上に見られておいでになっても、口惜くちおしいこともあれでは多かろうじゃないか。法皇様からはどのお子様よりも大事がられて御成人なすって、今は同じだけの御身分でない方と同等の一人

の夫人で、しかも最愛の方としてはお扱われにならないというくわしいことを私は知っているのだよ。人は無常の世界にいるのだから、君が宮の御幸福をこうして守ろうとしていることが皆むだなことになるかもしれないからね。私に冷酷なことを言っておかないほうがいいよ」

「人ほど大事がられない奥様だとお言いになつて、それをあなた  
の力でよくしていただけるといふのですか。六条院様と宮様は普  
通の夫婦といふのもありませんよ。保護者もなく一人でおいで  
になりますよりはといふ思おほしめ召しで親代わりにお頼みになつたの  
ですもの。院がお引き受けになりましたのもその気持ちでなすつ  
たことですもの、つまらないことを言つて、結局は宮様を悪くあ

なたはおつしやるのですね」

ついには腹をたててしまった小侍従の機嫌きげんを衛門督えもんのかみはとつていた。

「ほんとうのことを言えば、あのまれな美貌びぼうの六条院様を良人おつとにお持ちになる宮様に、お目にかかつて自身が好意を持たれようとは考えても何もいないのだよ。ただ一言を物越しに私がお話するだけのことで、宮様の尊厳をそこねることはないじゃないか。神や仏にでも思っていることを言つて咎とがや罰を受けはしないじゃないか」

こう言つて衛門督は絶対に不浄なことは行なわないという誓いまでも立てて、ひそかに御訪問をするだけの手引きを頼むのを、



初めのうちは強硬にあるまじいことであると小侍従は突きはねていたが、もともとあさはかな若い女房であるから、こうまでも思  
い込むものかと、熱心な頼みに動かされて、

「もしそんなことによいような隙すきが見つかりましたら御案内いた  
しましょう。院がおいでにならぬ晩はお几帳きちようのまわりに女房が  
たくさんいます。お帳台には必ずだれかが一人お付きしているの  
ですから、どんな時にそうしたよいおりがあるものでしょうかね」  
と困ったように言いながら小侍従は帰って行った。

どうだろう、どうだろうと毎日のように衛門督から責めて来ら  
れる小侍従は困りながらしまいにある隙すきのある日を見つけて衛門  
督へ知らせてやった。督は喜びながら目だたぬふうを作って小侍

従を訪ねて行つた。衛門督自身もこの行動の正しくないことは知つていたのであるが、物越しの御様子に触れては物思いがいつそうつのはずの明日までは考えずに、ただほのかに宮のお召し物の褻つまさき先の重なりを見るにすぎなかつたかつての春の夕べばかりを幻に見る心を慰めるためには、接近して行つて自身の胸中をお伝えして、それからは一行の文のお返事を得ることもなればというほどの考えで、宮が憐あわれんでくださるかもしれぬというはかない希望をいただいている衛門督でしかなかつた。これは四月十幾日のことである。明日は賀茂の齋院の御禊みそぎのある日で、御姉きょうだい妹の齋院のために儀装車に乗せてお出しになる十二人の女房があつて、その選にあつた若い女房とか、童女とかが、縫い物をした

り、化粧をしたりしている一方では、自身らどうして明日の見物に出ようとする者もあつて、仕度したくに大騒ぎをされていて、宮のお居間のほうにいる女房の少ない時で、おそばにいるはずの按察使あぜちの君も時々通つて来る源中将が無理に部屋のほうへ呼び寄せたので、この小侍徒だけがお付きしているのであつた。よいおりであると思つて、静かに小侍徒はお帳台の中の東の端へ衛門督の席を作つてやった。これは乱暴な計らいである。宮は何心もなく寝ておいでになつたのであるが、男が近づいて来た気配けはいをお感じになつて、院がおいでになつたのかとお思ひになると、その男はかしまつた様子を見せて、帳台の床の上から宮を下へ抱きおろそうとしたから、夢の中でもものに襲われているのかとお思ひになつて、しい

てその者を見ようとあそばすと、それは男であるが院とは違つた男であつた。これまで聞いたこともおありにならぬような話を、その男はくどくどと語つた。宮は気味悪くお思ひになつて、女房をお呼びになつたが、お居間にはだれもいなかったからお声を聞きつけて寄つて来る者もない。宮はお慄ふるい出しになつて、水のよくな冷たい汗もお身体からだに流しておいでになる。失心したようなこの姿が非常に御可憐かれんであつた。

「私はつまらぬ者ですが、それほどお憎まれするのが至当だとは思われません。昔からもつたいたない恋を私はいだいておりました。が、結局そのままにしておけば闇やみの中で始末もできたのですが、あなた様をお望み申すことを発言いたしましたために、院のお耳

にはいり、その際はもつてのほかのこととも院は仰せられません  
でした。それも私の地位の低さにあなた様を他へお渡しする結果  
になりました時、私の心に受けました打撃はどんなに大きかった  
でしょう。もうただ今になってはかいのないことを知っておりま  
して、こうした行動に出ますことは慎んでいたのですが、どれほ  
どこの失恋の悲しみは私の心に深く食い入っていたのか、年月が  
たてばたつほど口惜くちおしく恨めしい思いがつのつていくばかりで、  
恐ろしいことも考えるようになりました。またあなた様を思う心  
もそれとともに深くなるばかりでございました。私はもう感情を  
抑制することができなくなりました。こんな恥ずかしい姿である  
まじい所へもまいりましたが、一方では非常に思いやりのないこ

とを自責しているのですから、これ以上の無礼はいたしません」

こんな言葉をお聞きになることによつて、宮は衛門督えもんのかみである

ことをお悟りになつた。非常に不愉快にお感じにもなつたし、怖おそ

ろしくもまた思おぼしめ召されもして少しのお返辞もあそばさない。

「あなた様がこうした冷やかなお扱いをなさいますのはごもつともですが、しかしこんなことは世間に例のないことではないのでございますよ。あまりに御同情の欠けたふうをお見せになれば、私は情けなさに取り乱してどんなことをするかもしれませぬ。かわいそうだとだけ言つてください。そのお言葉を聞いて私は立ち去ります」

とも、手を変え品を変え宮のお心を動かそうとして説く衛門督

であつた。想像しただけでは非常な尊厳さが御身を包んでいて、目前で恋の言葉などは申し上げられないもののように思われ、熱情の一端だけをお知らせし、その他の無礼を犯すことなどは思ひも寄らぬことにしていた督であつたにかかわらず、それほど高貴な女性とも思われぬ、たぐいもない柔らかさと可憐かれんな美しさがすべてであるような方を目に見てからは、衛門督の欲望はおさえられぬものになり、どこへでも宮を盗み出して行つて夫婦になり、自分もそれとともに世間を捨てよう、世間から捨てられてもよいと思うようになった。

少し眠つたかと思うと衛門督は夢に自分の愛している猫ねこの鳴いている声を聞いた。それは宮へお返ししようと思つてつれて来て

いたのであつたことを思い出して、よけいなことをしたものだと思つた時に目がさめた。この時にはじめて衛門督は自身の行為を悟つたのである。が宮はあさましい過失をして罪に墮おちたことで、悲しみにおぼれておいでになるのを見て、

「こうなりましたことによりましても、前生の縁がどんなに深かつたかを悟つてくださいませ。私の犯した罪ですが、私自身も知らぬ力がさせたのです」

不意に猫が端を引き上げた御簾みすの中に宮のおいでになつた春の夕べのことも衛門督えもんのかみは言い出した。そんなことがこの悲しい罪に墮おちる因をなしたのかと思召おほしめすと、宮は御自身の運命を悲しくばかり思召されるのであつた。もう六条院にはお目にかかれな



いことをしてしまつた自分であるとお思いになることは、非常に悲しく心細くて、子供らしくお泣きになるのを、もつたいなくも憐れにも思つて、自分の悲しみと同時に恋人の悲しむのを見るのは堪えがたい気のする督であつた。夜が明けていきそうなのであるが、帰って行けそうにも男は思われぬ。

「どうすればよいのでしょうか。私を非常にお憎みになつていますから、もうこれきり逢つてくださらないことも想像されますが、ただ一言を聞かせてくださいませんか」

宮はいろいろとこの男からお言われになるのもうるさく、苦しくて、ものなどは言おうとしてもお口へ出ない。

「何だか気味が悪くさえなりましたよ。こんな間柄というものが

あるでしようか」

男は恨めしいふうである。

「私のお願ひすることはだめなのでしよう。私は自殺してもいい気にもとからなっているのですが、やはりあなたに心が残つて生きていましたものの、もうこれで今夜限りで死ぬ命になつたかと思ひますと、多少の悲しみはございますよ。少しでも私を愛してくださるお心ができましたら、これに命を代えるのだと満足して死ねます」

と言つて、衛門督は宮をお抱きして帳台を出た。隅すみの室まの屏びよう風ぶを引きひろ拵かげげ蔭かげを作つておいて、妻戸ゆうべをあけると、渡わた殿どのの南の戸がまだ昨夜ゆうべはいつた時のままにあいてあるのを見つけ、渡殿

の一室へ宮をおおろしした。まだ外は夜明け前のうす闇やみであつたが、ほのかにお顔を見ようとする心で、静かに格子をあげた。

「あまりにあなたが冷淡でいらつしやるために、私の常識というものはずつかりなくされてしまいました。少し落ち着かせてやろうと思召すのでしたら、かわいいそうだとだけのお言葉をかけてください」

衛門督が威嚇いかくするように言うのを、宮は無礼だと思ひになつて、何かとがめる言葉を口から出したく思召したが、ただ慄ふるえられるばかりで、どこまでも少女らしいお姿と見えた。ずんずん明るくなつていく。あわただしい気になつていながら、男は、

「理由のありそうな夢の話も申し上げたかったですけれど、あ

くまで私をお憎みになりますのもお恨めしくてよしますが、どんなに深い因縁のある二人であるかをお悟りになることもあなたにあるでしょう」

と言つて出て行こうとする男の気持ちに、この初夏の朝も秋のもの悲しさに過ぎたものが覚えられた。

おきて行く空も知られぬ明けぐれに**いづくの露のかかる袖な**そで  
り

宮のお袖を引いて督かみのこう言つた時、宮のお心はいよいよ帰つて行きそうな様子に楽になつて、

あけぐれの空にうき身は消えななん夢なりけりと見てもやむ  
べく

とはかなそうにお言いになる声も、若々しく美しいのを聞きさ  
したままのようにして、出て行く男は魂だけ離れてあとに残るも  
ののような気がした。

夫人の宮の所へは行かずに、父の太政大臣家へそつと衛門督<sup>えもんのかみ</sup>  
は来たのであつた。夢と言つてよいほどのはかない逢う瀬が、な  
おありうることは思えないとともに、夢の中に見た猫の姿も恋  
しく思い出された。大きな過失を自分はしてしまつたものである。

生きていることがまぶしく思われる自分になつたと恐ろしく、恥ずかしく思つて、督はずつとそのまま家に引きこもつていた。

恋人の宮のためにも濟まないことであるし、自身としてもやましい罪人になつてしまつたことは取り返しのつかぬことであると思ふと、自由に外へ出て行つてよい自分とは思われなかつたのである。陛下の寵ちようき姫を盗みたてまつるようなことをしても、これほどの熱情で愛している相手であつたなら、処罰を快く受けるだけで、このやましきはないはずである。そうした咎とがは受けないであらうが、六条院が憎悪ぞうおの目で自分を御覧になることを想像することは非常な恐ろしい、恥ずかしいことであると衛門督は思つていた。

貴女きじよと言つても少し蓮はすつば葉な心が内にあつて、表面が才女らしくも  
 もあり、無邪気でもあるような見かけとは違つた人は誘惑にもかかりやすく、  
 無理な恋の会合を相手としめし合わせてすることにもなりやすいのであるが、  
 女によさん三みやの宮は深さもないお心ではあるが、臆おくびよう病一方な性質から、もう秘密を人に発見されてしまつた  
 ようにも恐ろしがりもし、恥じもしておいでになつて、明るいほうへいざつて  
 出ることすらおできにならぬまになつておいでになつて、悲しい運命を負つた  
 自分であるともお悟りになつたであろうと思われる。宮が御病気  
 のようであるという知らせを受けになつて、六条院は、はなはだしく悲し  
 んでおいでになる夫人の病気のほかに、またそうした心痛すべきことが起こつたか

驚いて見舞いにおいでになったが、宮は別にどこがお悪いというふうにも見えなかつた。ただ非常に恥ずかしそうにして、そしてめいっておいでになった。院のお目を避けるようにばかりして、下を向いておいでになるのを、久しく訪ねなかつた自分を恨めしく思っているのであろうと、院のお目にそれが憐れあわにも、いたいたしいようにも映つて、紫夫人の容体などをお話しになり、

「もうだめになるのでしょう。最後になつて冷淡に思わせてやりたくないと考えるものですから付いていつているのですよ。少女時代から始終そばに置いて世話をした妻ですから、捨てておけない気もして、こんなに幾月もほかのことは放擲ほうてきしたふうで付ききりで看護もしてありますが、またその時期が来ればあなたによく



思ってもらえる私になるでしょう」

などお言いになるのを、宮は聞いておいでになって、あの罪は気<sup>け</sup>ぶりにもご存じないことを、お気の毒なことのようにも、濟まないことのようにもお思いになって、人知れず泣きたい気持ちでおいでになった。

衛門督の恋はあのことであつて以来、ますますつるばかりで、はげしい煩<sup>はん</sup>悶<sup>もん</sup>を日夜していた。賀茂祭りの日などは見物に出る公<sup>きん</sup>達<sup>だち</sup>がおおぜいで来て誘い出そうとするのであつたが、病気であるように見せて寢室を出ずに物思いを続けていた。夫人の女<sup>にょ</sup>二<sup>に</sup>の宮<sup>みや</sup>には敬意を払うふうに見せながらも、打ち解けた良人<sup>おとと</sup>らしい愛は見せないのである。督は夫人の宮のそばでつれづれな時間を

つぶしながらも心細く世の中を思っているのであった。童女が持っているあおい葵を見て、

悔くやしくもつみをかしけるあふひ葵草神の許せる挿頭かざしならぬに

こんな歌が口ずさまれた。後悔とともに恋の炎はますます立ちぼるようなわけである。町々から聞こえてくる見物車の音も遠い世界のことに聞きながら、退屈に苦しんでもいるのであった。女二の宮も衛門督えもんのかみの態度の誠意のなさをお感じになつて、それは何がどうとはおわかりにならないのであるが、御自尊心が傷つけられているようで、物思わしくばかり思召された。女房な

どは皆祭りの見物に出て人少なな昼に、寂しそうな表情をあそばして十三絃げんの琴を、なつかしい音に弾ひいておいでになる宮は、さすがに高貴な方らしいお美しさと艶えんな趣は備わってお見えになるのであるが、ただもう少しの運が足りなかったのだと衛門督は自身のことを思っていた。

もろかづら落ち葉を何に拾ひけん名は睦むつまじき挿頭かざしなれども

こんな歌をむだ書きにしていた。もったいないことである。

院はまれにお訪たずねになった宮の所からすぐに帰ることを気の毒にお思いになり、泊まっておいでになったが、病夫人を気づかわ

しくばかり思つておいでになる所へ使いが来て、急に息が絶えた  
と知らせた。院はいつさいの世界が暗くなつたようなお気持ちで  
二条の院へ歸つてお行きになるのであつたが、車の速度さえもど  
かしく思つておいでになると、二条の院に近い大路はもう立ち騒  
ぐ人で満たされていた。邸内からは泣き声が多く聞こえて、大き  
な不祥事のあることは覆い<sup>おお</sup>がたく見えた。夢中で家へおはいりに  
なつたが、

「この二、三日は少しお快いようでしたのに、にわか  
に絶息をあそばしたのでございます」

こんな報告をした女房らが、自分たちも、いつしよに死なせて  
ほしいと泣きむせぶ様子も悲しかった。もう祈禱<sup>きとう</sup>の壇は壊<sup>こぼ</sup>たれて、

僧たちもきわめて親しい人たちだけが残つてもそのほかのは仕事じまいをして出て行くのに忙しいふうを見せている。こうしてもう最愛の妻の命は人力も法力も施しがたい終わりになったのかと、院はたとえようもない悲しみをお覚えになった。

「しかしこれは物怪もののけの所業だろうと思われる。あまりに取り乱して泣くものでない」

と院は泣く女房たちを制して、またまた幾つかの大願をお立てになった。そしてすぐれた修験の僧をお集めになり、

「これが定きまつた命数でも、しばらくその期をゆるめていただきたい、不動尊は人の終わりにしばらく命を返す約束を衆生にしてください。それには自分たちはおすがりする。それだけの命なり

とも夫人にお授けください」

こう僧たちは言つて、頭から黒煙を立てると言われるとおりの熱誠をこめて祈つていた。院も互いにただ一目だけ見合わす瞬間が与えられたい、最後の時に見合わせることでできなかった残念さ悲しさから長く救われたいと言つてお歎なげきになる御様子を見ては、とうていこの夫人のあとにお生き残りになることはむずかしからうと思われて、そのことをまた人々の歎なげくことも想像するにかたくない。

この院の夫人への大きな愛が御みほとけ仏を動かしたのか、これまでも少しも現われてこなかった物怪が、小さい子供のりうつに憑よつて来て、大声を出し始めたのと同時に夫人の呼吸いきは通つてきた。院はうれし

くも思召され、また不安でならぬようにも思召された。物怪は僧たちにおさえられながら言う、

「皆ここから遠慮をするがよい。院お一人のお耳へ申し上げたいことがある。私の霊を長く法力で苦しめておいでになったのが無情な恨めしいことですから、懲らしめを見せようと思いましたが、さすがに御自身の命も危険なことになるまで悲しまれるのを見ては、今こそ私は物怪であつても、昔の恋が残っているために出て来る私なのですから、あなたの悲しみは見過ごせないで姿を現わしました。私は姿など見せたくなかつたのだけれど」

と物怪は叫んだ。髪を顔に振りかけて泣く様子は、昔一度御覧になった覚えのある物怪であつた。その当時と同じ無気味さがお

心に湧わいてくるのも恐ろしい前兆のようにお思われになって、その子供の手を院はお捉とらえになつて、前へおすわらせになり、あさましい姿はできるだけ人に見させまいとお努めになつた。

「ほんとうにその人なのか。悪い狐きつねなどが故人を傷つけるためにでたらめを言つてくることがあるから、確かなことを言うがいい。他人の知らぬことで私にだけ合点のゆくことを何か言つてみるがいい。そうすれば少しは信じてもいい」

院がこうお言いになると、物怪はほろほろと涙を流しながら、悲しそうに泣いた。

「わが身こそあらぬさまなれそれながら空おぼれする君は君な



り

恨めしい、恨めしい」

と泣き叫びながらもさすがに羞恥しゆうちを見せるふうが昔の物怪に  
違う所もなかった。嘘うそでないことからかえつてうとましい気がよ  
けいにして情けなくお思われになるので、ものを多く言わずまい  
と院はされた。

「中宮ちゆうぐうに尽くしてくださいますことはうれしい、ありがたい  
こととはあの世から見てもありますが、あの世界の人になつては  
子の愛というものを以前ほど深くは感じないのですか、恨めしい  
とお思いしたあなたへの執着だけがこんなふうにもなつて残つて

います。その恨みの中でも、生きていますところにほかの人よりも軽くお扱いになったことよりも、夫婦のお話の中で私を悪くお言いになったことが私をくやしくさせました。もう私は死んでいるのですから、私が悪くつてもあなたはよくとりなして言ってくだすつていいではありませんか。そうお恨みしただけで、こんな身になつていますと大おおぎよう形な表示にもなつたのです。奥様を深く恨んでいませんが、法の護まもりが強くて近づけないので反抗してみただけです。あなたのお声もほのかに承ることができましたからもういいのです。私の罪の軽くなるような方法を講じてください。修法、読どきよう経の声は私にとって苦しい焰ほのおになつてまつわつてくるだけです。尊い仏の慈悲の声に接したいのですが、それを聞くこ

とのできないのは悲しゅうございます。中宮にもこのことをお話しくださいませ。後宮の生活をするうちに人を嫉妬しつとするような心を起こしてはならない、齋宮をお勤めになった間の罪を御みほとけ仏に許していただけるだけの善根を必ずなさい、あの世で苦しむことをよく考えなければならぬとね」

などと言うが、物怪に向かつてお話しになることもきまり悪くお思ひになつて、物怪がまた出ぬように法の力で封じこめておいて、病夫人を他の室へお移しになつた。

紫夫人が死んだという噂うわさがもう世間に伝わつて弔詞くやみを述べに来る人たちのあるのを不吉なことに院はお思ひになつた。今日の祭りの帰りの行列を見物に出ていた高官たちが、帰宅する途中でそ

の噂を聞いて、

「たいへんなことだ。生きがいのあつた幸福な女性が光を隠される日だから小雨も降り出したのだ」

などと解釈を下す人もあつた。また、

「あまりに何もかもそろつた人というものは短命なものなのだ。

『何をさくらに』(待てといふに散らでしとまるものならば何を桜に思ひまさまし)という歌のように、そうした人が長生きしておれば、一方で不幸に甘んじていなければならぬ人も多くできるわけだ。二品の宮が院の御寵ちようあい愛を一身にお集めになる日もこれで来るだろう。あまりにお気の毒なふうだったからね」

などとも言う人があつた。衛門督えもんのかみは引きこもっていた昨日の

退屈さに懲りて今日は弟の左大弁、参議などの車の奥に乗って見物に出っていた町で、人の言い合っている噂が耳にはいった時に、この人は一種変わった胸騒ぎがした。「散ればこそいとど桜はめでたけれ」（何か浮き世に久しかるべき）などとも口ずさみながら同車の人々とともに二条の院へ参った。まだ確かでないことであるから、形式を病氣見舞いにして行つたのであるが、女房の泣き騒いでいる時であつたから、眞実であつたかとさらに驚かれた。ちようど式部卿の宮がお駈かけつけになつた時で、萎しおれたふうで宮は内へおはいりになつた。押し寄せて来た多数の見舞い客の挨拶あいさはまだことごとくは取り次ぎきれずに、家従たちの忙しがつている所へ左大將が涙をふきながら出て来た。

「どんなふうでいらつしやるのですか。不吉なことを言う人があ  
るのを私たちは信じることができないうで伺つたのです。ただ長い  
御疾患を御心配申し上げて参つたのです」

などと衛門督は言つた。

「重態のまままで長く病んでおられたのですが、今朝の夜明けに絶  
息されたのは、それは物ものの怪のせいだったのです。ようやく呼い吸き  
が通うようになったと言つて皆一安心しましたが、まだ頼もしく  
は思われないのですからね。気の毒でね」

と言う大将には実際今まで泣き続けていたという様子が残つて  
いた。目も少しは腫はれていた。衛門督は自身のだいそれた心から、  
大将が親しむこともなかつた継母のことでこうまで悲しむのは不

思議なことであると目をつけた。こんなふうには高官らも見舞いに集まって来たことをお聞きになつて、院からの御挨拶が伝えられた。

「重い病人に急変が来たように見えましたために女房らが泣き騒ぎをいたしましたので、私自身もつい心の平静をなくしているおりからですから、またほかの日に改めて御好意に対するお礼を申しましょう」

院のお言葉というだけで、もう衛門督えもんのかみの胸は騒ぎ立っていたのである。こうした混雑紛れでなくては自分の来られない場所であることを知っているのであるから腹ぎたないふるまいである。

そせい蘇生したのちをまだ恐ろしいことに院はお思ひになつて、夫人

のためにもろもろの法力の加護をお求めになつた。生いきりよう靈ようで現

われた時さえも恐ろしかつた物怪が、今度は死靈になつてゐるのであるから、宗教画に描かれてある恐ろしい形相も想像されて、気味悪く、情けなく思召された院は、中宮のお世話をされることもこの時だけは気の進まぬことに思召されたが、しかしその人には限らず女というものは皆同じように、人間の深い罪もとの原因を作もるものであるから、人生のすべてがいやなものに思われるとお考えになり、あれは他人がだれも聞かぬ夫婦の間の話の中にただ少し言つたことに過ぎなかつたのにと、そんなことをお思い出しになると、いよいよ愛欲世界がうるさくお考えられになるのであつた。ぜひ尼になりたいと夫人が望むので、頭の頂の髪を少し取つ



て、五戒だけをお受けさせになった。戒師が完全に仏の戒めを守る誓いを、仏前で尊い言葉で述べる時に、院は体面もお忘れになり、夫人に寄り添って涙を拭ぬぐいつつ夫人とともに仏を念じておいでになったのを見ると、聡そうめい明な貴人も御愛妻の病に仏へおすがりになる心は凡人に変わらないことがわかった。どんな方法を講じて夫人の病を救い、長く生命いのちを保たせようかと夜昼お歎なげきになるために、院の顔にも少し瘦やせが見えるようになった。五月などはまして氣候が悪くて病夫人の容体がさわやいでいくとも見えなかつたが、以前よりは少しいようであつた。しかもまだ苦し日々が時々夫人にあつた。院は物怪の罪を救うために、日ごとほけきょうに法華經一卷ずつを供養させておいでになった。そのほか何か

と宗教的な営みを多くあそばされた。病床のかたわらで不断の読ど経きようもさせておいでになるのであつて、声のいい僧を選んでそれにはあてておありになった。一度現あわれて以来おりおり出て物怪は悲しそうなことを言うのであつて、全然退のいては行かないのである。暑い夏の日になつていよいよ病夫人の衰弱ははげしくなるばかりであるのを院は歎き続けておいでになった。病に弱つていながらも院のこの御様子を夫人は心苦しく思い、自分の死ぬことは何でもないがこんなにお悲しみになるのを知りながら死んでしまふのは思いやりのないことであろうから、その点で自分はまだ生きるように努めねばならぬと、こんな気が起こつたころから、おもゆ米湯なども少しずつは取ることになつたせい、六月になつてか

らは時々頭を上げて見ることもできるようになった。珍しくうれしくお思いになりながら、なお院は御不安で六条院へかりそめに行つて御覧になることもなかつた。

姫宮はあの事件があつてから煩悶はんもんを続けておいでになるうちに、お身体からだが常態でなくなつて行つた。御病氣のようにお見えになるが、それほどたいしたことではないのである。六月になつてからはお食しよくよく慾が減退してお顔色も悪くおやつれが見えるようになった。衛門督は思いあまる時々夢のように忍んで来た。宮のお心には今も愛情が生じているのではおありにならないのである。罪をお恐れになるばかりでなく、風采ふうさいも地位もそれはこれに匹敵する価値のない人であることはむろんであつたし、氣どつ

て風流男がる表面を見て、一般人からは好もしい美男という評判は受けていても、少女時代から光源氏を良人おととに与えられておいでになった宮が、比較して御覧になつては、それほど価値に思われる顔でもないのであるから、無礼者であるという御意識以外の何ものもない相手のために、妊娠をあそばされたというのはお気の毒な宿命である。気のついた乳母めのとたちは、

「たまにしかおいでにならないで、そしてまたこんなふうに重荷を宮様へお負わせになる」

と院をお恨みしていた。寝やすんでおいでになることをお知りになつて、院は訪ねたずようとあそばされた。

夫人は暑い時分を清くしていたいと思ひ、髪を洗つてやや爽そうか

快いなふうになつていた。そしてそのまままた横になつていたのであるから、早くかわかず、まだぬれている髪は少しのもつれもなく清らかにゆらゆらと、病む麗人に添つていた。青みを帯びた白い顔は美しくてすきとおるような皮膚つきである。虫のもぬけのようにたよりない。しかも長く捨てて置かれた二条の院は女によお王うの美の輝きで狭げにさえ見えた。昨日今日になつて人ごこちが夫人に帰つてきたことによつて院内が活気づいてにわか流れも木草も繕われだした。そうした庭をながめても、それが夏の終わりの景色けしきであるのに病びようが臥がしていた間の月日の長さが思われた。池は涼しそうで蓮はすの花が多く咲き、蓮葉は青々として露がきらきら玉のように光っているのを、院が、

「あれを御覧なさい。自分だけが爽快がつている露のようじゃありませんか」

とお言いになるので、夫人は起き上がって、さらに庭を見た。こんな姿を見ることが珍しくて、

「こうしてあなたを見ることのできるのは夢のようだ。悲しくて私自身さえも今死ぬかと思われた時が何度となくあったのだから」と、院が目には涙を浮かべてお言いになるのを聞くと、夫人も身にしむように思われて、

消え留まるほどやは経ふべきたまさかに蓮はちすの露のかかるばかり  
を

と言つた。

契りおかんこの世ならでも蓮の葉に玉ゐる露の心隔つな

これは院のお歌である。六条院へはお氣が進まないのであるが、宮中の聞こえと法皇への御同情から、宮の床についておられる知らせを受けていながら、いっしよに住むほうの妻の大病の氣づかわしきから訪ねて行くこともあまりしなかつたのであるから、女王の病のこんなふうになしよい間にしばらくあちらの家へ行つていようという心におなりになつて院はお出かけになつた。

宮は心の鬼に院の前へ出ておいでになることが恥ずかしく晴れがましくて、ものをお言いになる返辞もよくきれないのを長い絶え間にこの子供らしい人もさすがに恨んでいるのであろうと院は心苦しくお思いになり、慰めることにかかつておいでになった。お世話役の女房をお呼び出しになり、宮の御不快の経過などを院がお聞きになると、それは妊娠の徴候があつてのことであるという答えをした。

「今になって全く珍しいことが起こってきたね」

とだけ院はお言いになったが、お心の中では長くそばにいる人たちの中にもそうしたことはないのであるから、不祥なことがこちらで起こっているのではないかというような疑いをお覚えにな



りながら、それをくわしく聞こうとはされないうで、ただ悪阻つわりに悩む人の若い可憐かれんな姿に愛を覚えておいでになった。やつと思ひ立つておいでになったのであるから、すぐにお歸りになることもできず、二、三日おいでになる間にも、二条の院の女王の容体ばかりがお気づかわれになって、そのほうへ手紙ばかりを書き送つておいでになった。

「あんなにもしばらくの間にお言いになる感情がたまるのですかね。宮様をとうとうお気の毒な方様とお見上げする時が来ましたよ」

などと宮の御過失などは知らぬ人たちが言う。秘密に携わつてゐる小侍は院の御滞留の間を無事に過ごしうるかと胸をとどろ

かせていた。

えもんのかみ衛門督は院が六条のほうへ来ておいでになることを聞くと、だいそれた嫉妬しつとを起こして、自己の恋のはげしさをさらに書き送る気になって手紙をよこした。院が暫時ざんじ対のほうへ行つておいでになる時で、だれも宮のお居間にいない様子を見て、小侍従はそれを宮にお見せした。

「いやなものを読めというのね。私はまた気分が悪くなつてきているのに」

こう言つて、宮はそのまま横におなりになつた。

「この端書きはしががあまりに身にしむ文章なんでございますもの」

小侍従は衛門督の手紙を拈ひろげた。ほかの女房たちが近づいて来

た気配けはいを聞いて、手でお几帳きちょうを宮のおそばへ引き寄せて小侍従は去つた。宮のお胸がいつそうとどろいている所へ院までも帰つておいでになつたために、手紙をよくお隠しになる間がなくて、敷き物の下へはさんでお置きになつた。二条の院へ今夜になれば行こうと院はお思いになり、そのことを宮へお言いになるのであつた。

「あなたはたいしたことがないようですから、あちらはまだあまりにたよりないようなのを見捨てておくように思われても、今さらかわいそうですから、また見に行つてやろうと思ひます。中傷する者があつても、あなたは私を信じておいでなさいよ。また忠実な良人おっとになる日が必ずありますよ」

これまではこんな時にも、子供めいた冗じょうだん談などをお言ひになつて、朗らかにしている方なのであつたが、非常にめいつておしまひになり、院のほうへ顔を向けようともしられないのを、内にいづく嫉妬しつとの影がさしているとばかり院はお思ひになつた。昼の座敷でしばらくお寝入りになつたかと思つたと、蜩ひぐらしの啼く声でお目がさめてしまった。

「ではあまり暗くならぬうちに出かけよう」

と言ひながら院がお召しかえをしておいでになると、

「『月待ちて』（夕暮れは道たどたどし月待ちて云々うんぬん）とも言ひますのに」

若々しいふうで宮がこうお言ひになるのが憎く思われるはずも

ない。せめて月が出るころまででもいてほしいとお思いになるのかと心苦しくて、院はそのまま仕度したくをおやめになった。

夕露そでぬに袖濡そでぬらせとやひぐらしの鳴くを聞きつつ起きて行くらん

幼稚なお心の実感をそのままな歌もおかわいくて、院は膝ひざをおかがめになつて、

「苦しい私だ」

と歎たんそく息をあそばされた。

待つ里もいかが聞くらんかたがたに心騒がすひぐらしの声

などと躑ちゆうちよ躑ちよをあそばしながら、無情だと思われることが心

苦しくてなお一泊してお行きになることにあそばされた。さすがにお心は落ち着かずに、物思いの起こる御様子で晩ばんさん饗はお取りにならずに菓子だけを召し上がった。

まだ朝あさ涼すずの間に帰ろうとして院は早くお起きになった。

「昨日の扇をどこかへ失ってしまったて、代わりのこれは風がぬるくていけない」

とお言いになりながら、昨日のうたた寝に扇をお置きになった場所へ行ってごらんになったが、立ち止まって目をお配りになる

と、敷き物のある一所の端が少し縫れたようになって下から、薄緑の薄うす様の紙に書いた手紙の巻いたのがのぞいていた。何心なく引き出して御覧になると、それは男の手で書かれたものであった。紙の匂いにおなどの艶えんな感じのするもので、骨を折った巧妙な字で書かれてあった。二重ねにこまごまと書いたのをよく御覧になると、それは紛れもない衛門督えもんのかみの手跡であった。院のお座の所で鏡をあけてお見せしている女房は御自分の御用の手紙を見ておいでになるものと思っていたが、小侍従がそれを見た時、手紙が昨日の色であることに気がついた。胸がぶつぶつと鳴り出した。粥かゆなどを召し上がる院のほうを小侍従はもう見ることもできなかつた。まさかそうではあるまい、そんな運命の悪戯いたずらが不意に行

なわれてよいものか、宮はお隠しになつたはずであると小侍従は努めて思おうとしている。宮は何もお知りにならずになお眠つておいでになるのである。こんな物を取り散らしておいて、それを自分でない他人が発見すればどうなることであろうとお思ひになると、その人が軽蔑けいべつされて、これであるから始終自分はあるががつていたのである。あさはかな性格はついに墮落を招くに至つたのであると院は解釈された。

お帰りになつたので、女房たちがあらかた宮のお居間から去つた時に、小侍従が来て、

「昨日の物はどうなさいました。今朝院けさが読んでいらつしやいましたお手紙の色がよく似ておりましたか」



と宮へ申し上げた。はつとお思いになって宮はただ涙だけが流れに流れる御様子である。おかわいそうではあるがふがない方である。と小侍従は見ている。

「どこへお置きになったのでございますか。あの時だれかが参つたものですから、秘密がありそうに思われますまいと、それほど

のことは何でもなかったのですが、よいことをしておりますと心ががめまして、私は退のいて行つたのでございますが、院が座敷へお帰りになりましたまではちよつと時間があつたのでございませぬ、お隠しあそばしたろうと安心をしております」

「それはね、私が読んでいた時にはいつていらつしやつたものだから、どこへしまふこともできずに下へは喜んでおいたのをその

まま忘れたの」

こう伺った小侍従は、この場合の気持ちをどう表現すればよいかも知らなかつた。そこへ行つて見たが手紙のあるはずもない。

「たいへんでございますね。あちらも非常に恐れておいでになりまして、毛筋ほどでも院のお耳にはいることがあつたら申し訳がないと言つておいでになりましたのに、すぐもうこんなことができたではございませんか。全体御幼稚で、男性に対して何の警戒もあそばさなかつたものですから、長い年月をかけた恋とは申しながら、こうまで進んだ関係になろうとはあちらも考えておいでにならなかつたことでございますよ。だれのためにもお気の毒なことをなさいましたね」

と無遠慮に小侍従は言う。お若い御主人を気安く思つて礼儀なしになつていたのであろう。宮はお返辞もあそばさないで泣き入つておいでになつた。御気分がお悪いばかりのようではなく、少しも物を召し上がらないのを見て、

「こんなにもお苦しそうでいらつしやるのに、それを捨ててお置きになつて、もうすつかり快よくなつておいでになる奥様の御介抱を一所懸命になさらなければならぬとはね」

と乳母めのとたちは恨めしがつた。

院はお帰りになつてから、まだ不審のお晴れにもならぬ今朝の手紙をよく調べて御覧になつた。女房のうちであの中納言に似た字を書く女があるのでないかという疑いさえお持ちになつたの

であるが、言葉づかいは明らかに男性であつて、他の者の書くはずのないことが内容になつてもいた。昔からの恋がようやく遂げられたのではあるが、なお苦しい思いに悩み続けていることが、文学的に見ておもしろく書かれてあつて、同情は惹くが、こんな関係で書きかわす手紙には人目に触れた時の用意がかねてなければならぬはずで、露骨にいちもくりようぜん一目瞭然に秘密を人が悟るようなこととはすべきでないものと、院はお思ひになり、りっぱな男ではあるが、こうした関係の女への手紙の書き方を知らない、落ち散ることも思つて、昔の日の自分はこれに類する場合も文章は簡単にして書き紛らしたものであるが、そこまでの細心な注意はできないものらしいと、えもんのかみ衛門督をけいべつ軽蔑あそばされるのであつた。

それにしても宮を今後どうお扱いすればよいであろうか、妊娠もそうした不純な恋の結果だったのである。情けないことである。人から言われたことでもなく、直接に証拠も見ながら、以前どおりにあの人を愛することは、自分のことながら不可能らしい。一時的の情人として初めから重くなどは思っていない相手さえ、ほかの愛人を持っていることを知っては不愉快でならぬものであるが、これはそうした相手でもない自分の妻である。無礼な男である。お上の後宮かみと恋の過失に陥る者は昔からあったが、それとこれとは問題が違ふ。宮仕えは男女とも一人の君主にお仕えするのであつて、同輩と見る心から友情が恋となつて不始末を起す結果も作られるのである。女御によごや更衣こういといつてもよい人格の人ばかり

りがいるわけではないから、浮き名を流す者はあつても、破綻はたんを見せない間は宮仕えを辞しもせずして、批難すべきことも起こつたであろうが、自分の宮に対する態度は第一の妻としてのみ待遇してきたではないか、心ではより多く愛する人をもさしおいて、最大級の愛撫あいぶを加えていた自分を裏切つておしまいになるようなことと、そんなことは同日に論ずべきでない、これは罪深いことではないかと反感のお起こりになる院でおありになつた。侍している君主のほうでもただ一通りの後宮の女性と御覧になるだけで、御愛情に接することもないような不幸な人に、異性の持つ友情が恋愛にも進んでゆけば、あるまじいこととは知りながらも、苦しむ男に一言の慰めくらいは書き送ることになり、相互の間に

恋愛が成長してしまう結果を見るような間柄で犯す罪には十分同情してよい点もあるが、自分のことながらも、あの男くらいに比べて思い劣りされるほどの無価値な者でないと思うがと、院は宮を飽き足らずお思いになるのであったが、またこの問題はほかへ知らせてはならぬと思うことで御煩悶はんもんもされた。父帝もこんなふうに関した罪を知っておいでになつて知らず顔をお作りになつたのではなからうか、考えてみれば恐ろしい自分の過失であつたと、御自身の過去が念頭に浮かんできた時、恋愛問題で人を批難することは自分にできないのであると思召おほしめされた。

素知らぬふりはしておいでになるが、物思わしいふうは他からもうかがわれて、夫人は危い命を取りとめた自分をお憐あわれみになる

心から、こちらへはお帰りになったものの、六条院の宮をお思いになると心苦しくてならぬ煩悶がお起こりになるのであろうと解釈していた。

「私はもう恢復かいふくしてしまったのでございますのに、宮様のお加減のお悪い時にお帰りになってお気の毒でございます」

「そう。少し悪い御様子だけれど、たいしたことでないのだから安心して帰って来たのですよ。宮中からはたびたび御使みつかいがあつたそうだ。今日もお手紙をいただいたとかいうことです。法皇の特別なお頼みを受けておられるので、お上かみもそんなにまで御関心をお持ちになるのですね。私が冷淡であればあちらへもこちらへも御心配をかけて済まない」



院が歎息たんそくをされると、

「宮中への御遠慮よりも、宮様御自身が恨めしくお思いになるほうがあなたの御苦痛でしょう。宮様はそれほどでなくてもおそばの者が必ずいろいろなことを言うでしょうから、私の立場が苦しゅうございます」

などと女によおう王は言う。

「私の愛しているあなたにとって、あちらのことは迷惑千万に違いないが、それをあなたは許して、つまらない者の感情をまで思いやつてくれる寛大な愛に比べて、私のはただお上が悪くお思いにならないかという点だけで苦勞をしているのは、あさはかな愛の持ち主というべきですね」

微笑をしてお言い紛らわしになる。

「六条院へはあなたが快くなつた時にいつしよに帰ればいいのですよ。宮の御訪問をするのもそれからあとのことです」

そうきめておいでになるように仰せられた。

「私は静かな独ひとりず棲みというものもしてみとうございますから、

あちらへおいでになつて、宮様のお心のお慰みになりますますまずつといらつしやい」

夫人からこんな勧めを聞いておいでになるうちに日数がたつた。院のおいでにならぬ間の長いことで今までは院をお恨みにもなつた宮でおありになるが、今はその一部を自身の罪がしからしめているのであるということをお知りになつて、しまいに法皇のお

耳へもはいったならどう思おぼしめ召すことであろうと、生きておいでになることすらも恐ろしくばかりお思われになるのであつた。お逢あいしたいとしきりに衛門督えもんのかみは言つてくるが、小侍従は面倒な事件になりそうなのを恐れて、こんなことがあつたと緑の手紙のことを書いてやつた。衛門督は驚いて、いつの間にそうしたことのできたのであろう、月日の重なるうちにはいろいろな秘密が外へ洩もれるかもしれないぬと思うだけでも恐ろしくて、罪を見る目が空にできた気がしていたのに、ましてそれほど確かな証拠が院のお手にはいったといふことは何たる不幸であろうと恥ずかしくもつたいなくすまない気がして、朝涼も夕涼もまだ少ないこのごろながらも身に冷たさのしみ渡るもののある気がして、たとえようも

ない悲しみを感<sup>じ</sup>た。長い歳<sup>としつき</sup>月の間、まじめな御用の時も、遊  
びの催しにもお身近の者として離れず侍してきて、だれよりも多  
く愛顧を賜<sup>たま</sup>わつた院の、なつかしいお優しさを思うと、無礼な者  
としてお憎しみを受けることになつては、自分は御前で顔の向け  
ようもない。そうかといつて、すっかりお出入りをせぬことにな  
れば人が怪しむことであらうし、院をばさらに御不快にすること  
にならうと煩<sup>はんもん</sup>悶<sup>もん</sup>する衛門督は、健康もそこねてしまい、御所へ  
出仕もしなかつた。大罪の犯人とされるわけではないが、もう自分  
の一生はこれでだめであるという氣のすることによつて、このこ  
とを予想しないわけでもなかつたではないかと、あやまつた大道  
に踏み入つた最初の自分が恨めしくてならなかつた。だいたい御

身分相当な奥深い感じなどの見いだせなかつた最初の御簾みすの隙間すきまも、しかるべきことではない。大将も軽々しいと思つたことはあの時の表情にも見えたなどと、こんなことも今さら思い合わせたりした。しいてその人から離れたいと願う心から欠点を捜すのかもしれない。どんなに貴人といつても、おおようで、気持ちの柔らかい一方な人は世間のこともわからず、侍女というものに警戒をしなければならぬこともお知りにならないで、取り返しのつかぬあやまちを御自身のためにも作り、人にも罪を犯させる結果になつたと思ひ、衛門督の心は、宮のお気の毒なことを思いやつて堪えがたい苦悶くもんをするのであつた。

宮が可憐かれんな姿で悪阻つわりに悩んでおいでになるのが院のお目に浮か

んで、心苦しく哀れにお思われになった。良人<sup>おとと</sup>としての愛は消えたように思つておいでになつても、恨めしいのと並行して恋しさもおさえがたくなりになり、六条院へおいでになつた。お顔を御覧になると胸苦しくばかりおなりになる院でおありになつた。祈<sup>きとう</sup>禱を寺々へ命じてさせてもおいでのなるのである。表面のお扱いでは以前と何も変わつていない。かえつて御優遇をあそばされるようにも見えるのであるが、夫婦としてお親しみになることはそれ以来断えてしまった。人目を紛らすために御同室にお寝<sup>やす</sup>みになりながら、院がお一人で煩<sup>はんもん</sup>悶をしておいでになるのを御覧になる宮のお心は苦しかった。秘密を知つたともお言いにならぬ院でおありになつたが、女宮は御自身で罪人らしく萎<sup>いしゆく</sup>縮しておい

でになるのも幼稚な御態度である。こんなふうの人であるから不祥事も起こったのであろう。貴女らしいとはいってもあまりに柔らかな性質は頼もしくないものであるとお考えになると、いろいろの人の上がお気がかりになった。女御があまりに柔軟な様子であることは、この宮における衛門督のような恋をする男があるとするれば、その目に触れた以上精神を取り乱して大過失を引き起こすに至るかもしれないぬ、女性のこうした柔らかい一方である人は、軽侮してよいという心を異性に呼ぶのか、刹那的せつなに不良な行為をさせてしまうものであると、院はこんなこともお思いになった。

右大臣夫人がそれという世話を受ける人もなくて、幼年時代から苦勞をしながら才も見識もあつて、自分なども義父らしくはしな

がらも、恋人に擬しておさえがたい情念を内に包んでいたのを、かどだたず気がつかぬふうに退け続けて、右大臣がけいちよう軽 佻な女房の手引きでしいて結婚を遂げた時にも、自身は単なる受難者であることを、それ以後の態度で明らかにして、親や身内の意志で成立した夫婦の形を作らせたことなどは、今思ってみてもきわめてりっぱなことであつたと、たまかずら玉 鬢のこともこのふがない人に比べてお思われになつた。深い宿縁があつて夫婦になつた人であるから、離婚をしようとは考えないが、品行問題で世評の立つことになれば、それにしたがつて知らず知らず多少の侮蔑をぶべつ自分には加えることになるであらう。あまりにも実質に伴わない尊敬をしてきたと、以前からのことを思つてもごらんになつた。



院は二条のおぼろづきよ朧月夜の尚侍になお心を惹かれておいでになるのであつたが、女によさん三みやの宮の事件によつて、後ろ暗い行動はすべきでないという教訓を得たようにお思ひになつて、その人の弱さにさえ反感に似たようなものをお覚えになつた。尚侍が以前から希望していたとおりに尼になつたことをお聞きになつた時には、さすがに残念な気がされてすぐに手紙をお書きになつた。その場合に臨んで、されてよい予報のなかつたことをお恨みになる言葉がつづられてあつた。

あまの世をよそに聞かめや須磨すまの浦に藻塩もしほた垂れしもたれなら  
なくに

人世の無常さを味わい尽くしながらも、今日まで出家を實行しえない私を、あなたはどんなに冷淡になっておいでになってもさすがに回向えこうの人数の中にはお入れくださるであろうと、頼みにされるところもあります。

などという長いお文ふみであつた。早くからの志であつたが、六条院がお引きとめになるために、それでない表面の理由は別として、尚侍は尼になるのを躪ちゆうちよ躪ちよするところがあつたのでさえあるから、このお手紙を見て青春時代から今日までの二人のつながりの深さも今さらに思われて身にしむ尚侍であつた。返事はもう今後書きかわすことのない終わりのものとして心をこめて書いた尚侍

の手跡が美しかった。

無常は私だけが体験から知ったものと思っておりますが、し  
おくれたと仰せになりますことで、こんなにも思われます。

あま船にいかかは思ひおくれけん明石あかしの浦にいさりせし君

回向えこうには、この世のすぐれた方として決してあなた様を洩もらし  
はいたしません。

これが内容である。濃い鈍色にびの紙に書かれて、櫛しきみの枝につけて  
あるのは、そうした人のだれもすることであっても、達筆で書か  
れた字に今も十分のおもしろみがあった。この日は二条の院にお

いになったので、夫人にも、もう実際の恋愛などは遠く終わった相手のことであつたから、院はお見せになつた。

「こんなふう<sup>に</sup>に侮辱されたのが残念だ。どんな目にあつても平気なように思われて恥ずかしい。恋愛的な交際ではなしに、友人として同程度の趣味を解する人で、仲よくできる異性はこの人と齋院だけが私に残されていたのだが、今はもう尼になつてしまわれた。ことに齋院などは尼僧の勤めをする一方の人になつておしまひになつた。多くの女性を見てきているが、高い見識をお持ちになつて、しかもなつかしい匂いにおの備わつていような点であの方に及ぶ人はなかつた。女を教育するのはむずかしいものですよ。夫婦になる宿命というものは、目に見えないもので、親の力でど

うしようもないものだから、結婚するまでの女の子の教育に親は十分力を尽くすべきだと思う。私は娘を一人しか持たなくてその責任の少ないのがうれしい。まだ若くて人生のよくわからなかったころは、子の少ないことが寂しく思われもしたのですがね。

まあ孫の内親王をよくお育てしておあげなさい。女御にようごはまだ大人になりきれないで宮廷へはいつてしまったのだから、すべてがいまだに不完全なものだろうと思われる。姫宮の教育は最高の女性を作り上げる覚悟で、微瑕びかもない方にして、一生を御独身でお暮らしになってもあぶなげのない素養をつけたいものですね。結婚をすることになっている普通の家の娘はまた良人おととさえりつぱであれば、それに助けられてゆくこともできますがね」

などと院がお言いになると、

「りっぱなお世話はできませんでも、生きています間は姫宮のおためになりたい心でございませうが、健康がこんなのではね」

と答えて夫人は心細いふうにわが身を思い、自由に信仰生活へはいることのできた人々をうらやましく思った。

「尚侍の所は尼装束などもまだよくととのつていないことだろうから、早く私から贈りたいと思うが、袈裟けさなどというものはどんなふうにしてこしらえるものだろう。あなたがだれかに命じて縫わせてください。一そろいは六条の東の人にしてもらいましょう。あまりに法服らしくなつては見た感じもいやだろうから、その点を考慮して作るのですね」

と院はお言いになった。青鈍色あおにびの一そろいを夫人は新尼君のために手もとで作らせた。院は御所付きの工匠をお呼び寄せになつて、尼用の手道具の製作を命じたりしておいでになった。座蒲ざぶ団とん、上敷うわしき、屏風びょうぶ、几帳きちょうなどのこともすぐれた品々の用意をさせておいでになった。

紫夫人の大病のために法皇の賀宴も延びて秋ということになつていたが、八月は左大将の忌月きつきで音楽のほうをこの人が受け持つのに不便だと思われたし、九月はまた院の太后のお崩れかくになつた月で、それもだめ、十月にはと六条院は思つておいでになつたが、女にょさん三みやの宮の御健康がすぐれないためにまた延びた。衛門督えもんのかみの夫人になつておいでになる宮はその月に参入された。舅しゅうとの太政大

臣が力を入れて豪奢ごうしゃな賀宴がささげられたのである。病気で引きこもっていた衛門督もその時はじめて外出をしたのであった。しかもそのあとはまた以前にかえつて、病床に親しむ督であった。女三の宮も御煩はんもん悶もんばかりをあそばされるせい、月が重なるにつれてますますお身体からだがお苦しいふうに見えた。院は恨めしいお気持ちにはあつても、可憐かれんな姿をして病んでおいでになる宮を御覧になつては、どうなるのであらうと不安を覚えてお歎なげきになることが多かつた。祈禱きとうをおさせになることで御多忙でもあつた。法皇も宮の御妊娠のことをお聞きになつて、かわいく想像をあそばされ、逢あいたく思おぼしめ召された。長く六条院は二条の院のほうに別れておいでになつて、お訪たずねになることもまれまれであると申し



上げた人も以前あったことによつて、御妊娠がただ事の結果でなくはないのであるまいかとふとこんなことを思召すとお胸が鳴るのでもあつた。人生のことが今さら皆お恨めしくて、紫夫人の病気のころは院があちらにばかり行つておいでになつたのを、もつともなこととはいへ、思いやりのないこととして聞いておいでになつたが、夫人の病後も院の御訪問はまれになつたというのは、その間に不祥なことが起こつたのではあるまいか。宮が自発的に墮落の傾向をおとりになつたのではなく、軽薄な女房の仕業しわざなどで不快な事件があつたのではなからうか、宮廷における男女の間は清潔な交際で終始しなければならぬものであるのに、その中にさえ醜聞を作る者があるのであるからと、こんなことまでも御

想像あそばされるのは、いつさいをお捨てになつた御心境にもなお御子をお思いになる愛情だけは影を残しているからである。法皇が愛のこもつたお手紙を宮へお書きになつたのを、六条院も来ておいでになる時で拝見されたのであつた。

用事もないものですから無沙汰ぶさたをしているうちに月日がたつということもこの世の悲しみです。あなたが普通でない身体からだになつて健康もそこねているということをお聞きしましたが、

今はどうですか。世の中が寂しくなるような運命に出あつても、忍んでお暮らしなさい。恨めしがら様子をお見せになつたり、妬ねたみを告げたりすることは上品なものではありません。

などと訓さとしておありになるのである。院はお気の毒で、心苦し

くて、宮に秘密のあることなどはお知りあそばされずに、自分の不誠意とばかり解釈しておいでになるのであらうとお思ひになつて、

「お返事はどうお書きになりますか。心苦しいお手紙で私はつらい気がしますよ。あなたにどんなことがあつても、人に変わった様子は見せまいと私は努めているのですよ。だれがいろいろなことを申し上げたのだらう」

とお言いになると、恥じて顔をおそむけになる宮のお姿が可憐かれんであつた。顔がすっかり瘦やせて物思ひに疲れておいでになるのが上品に美しい。

「あなたの幼稚な性質を知つておいでになつて、こんなにもお言

いになるのだと、私は他のことと思ひ合せてごもつともだと思  
われる点がありますよ。それで今後も危あぶなかく思われてならな  
い。こんなふうに言つてしまおうとは思わなかつたことですが、  
院が私を頼みがいなく思召すだろうと思うことが苦痛ですからね。  
あなたただけにでも私が軽薄な者でないことを認めてほしいと思う  
のですよ。深く物をお考へにならないで、人のいいかげんな言葉  
にお動きになるあなたには、私のほんとうの愛が浅いものに見え  
まするでしょうし、またあなたとは年齢としの差のはなはだしい良人おとと  
を軽蔑けいべつしたくもなるでしょうけれど、私としてそれを残念に思  
わないわけはありませんが、院の御在世中だけは、これを幸福な  
道としてお選びになつたことですから、老いた良人をもあまり無

視するようなことはお慎みになるがいいのですよ。昔から願って  
いる出家の志望も、自分よりは幼稚な宗教心しか持つまいと思っ  
ていた女の人たちが先に実行するのを傍観しているのも、私自身  
がこの世の欲を捨てえないのではなくて、出家をあそばす際には  
あなたをお託しになった院のお志に感激した心が、すぐまた続け  
てあなたを捨てて行くような行動を取らせなかつたのですよ。以  
前は気がかりに思われた人も今ではもう出家の絆ほだしにならないだけ  
になっていのです。女御だつてどうなるか知りませんが、皇子  
たちがお殖ふえにもなつてゆくのですから、後宮の地位などは問題  
にさえせねば苦勞のない立場を得られることだけはできると私も  
見ておけます。そのほかの人たちは成り行きのみまで、私といつ

しよに出家をしてしまつてももういいほどの年齢としになつてい  
このごろでは思われます。院ももう長くはおいでにならないでし  
よう。以前よりいつそうお身体からだが弱くおなりになつて、心細い御  
様子でいらつしやるのですから、今になつて悪い名などを  
お耳に入れて御心配をかけてはいけませんよ。この世は何でもあ  
りませんが、来世のお妨げになることをしてはあなたの罪も大き  
くなりますよ」

そのことと露骨にお言ひにならないのであるが、しみじみとお  
説きになるために、宮は涙ばかりがこぼれて、知らず知らずめい  
り込んでおしまいになつたのを御覧になる院も、お泣きになつて、  
「他の人がこうしたことを言うのを、聞く必要もない老としより人の理り

窟くつだと思つた私だが、いつのまにかそれを言うほうの人に私がなつてゐる。よけいなことを言う老人だと思ひになつていつそいいやになるでしょう」

ともお言ひになつて、硯すずりを引き寄せて御自身で墨をおすりになり、紙をお選よりになりなどして、お返事を書かせようとされるのであるが、宮は手も慄ふるえてお書きになれない。あの濃厚な言葉の盛られてあつた衛門督えもんのかみの手紙の返事はこんなに洩はらさずに書かれたであらうと思ひになると、また反感が起おこるのでもおありになつたが、それでも院は言葉などを口授くじゆしてお書かせになつた。

「お伺ういになることはこんなことで今月もだめでしたね。それに新婚者の女にょに二の宮みやが派手はでな御賀をおささげになつた時に、老人の

妻であるあなたが競争的に出て行くのは遠慮すべきだと思ひましたよ。十一月はあなたのお母様の忌月でしょう。十二月はあまりに押しつまってよろしくないし、あなたの身体からだも見苦しくなるだろうから、久しぶりにお姿を御覧に入れるのはいかがかと思ひますが、しかしそうそう延ばしてよいことではありませんからね、あまり物思いをしないようにして、朗らかな心になって、瘦やせたお顔のなおるようになささい」

などとお言いになって、さすがにかわいくは思召すのであつた。衛門督をどんな催し事にも必要な人物としてお招きになつて御相談相手に今まではあそばす院でおありになつたが、今度の法皇の賀に限つて何の仰せもない。人が不審がるであろうとはお思ひ



になるのであるが、その人が来てはすかしめられた老人である自分の見られることも不快であるし、自分が彼を見ては平静で心がありえなくなるかもしれぬと院はお思ひになつて、もう幾月も参殿しない人を、なぜかとお尋ねになることもないのである。ただの人たちは衛門督が病氣続きであつたし、六条院にもまた音楽その他のお催しの全くない年であるからと解釈していたが、左大将だけは何か理由のあることに違いない、多感多情な男であるから、自分が推測していたあの恋で自制の力を失うようなことがあつたのではないかとは見ていても、まだこれほど不祥なことが暴露してしまつたとは想像しなかつた。

十二月になつた。十幾日と法皇の御賀の日が定められて六条院

の中は用意に忙しくなった。二条の院の夫人はまだそのまま帰らずにいたが、御賀の試楽があるのに興味を覚えてもどつてきた。女御によごも実家にいた。今度のお産でお生まれになったのもまた男宮であつた。次々に皆かわいい宮様を夫人はお世話することに生きがいを覚えていた。試楽の日は右大臣夫人も六条院へ来た。左大臣は東北の御殿でそれ以前にすでに毎日監督する舞曲の練習をさせていたから、花散里はなちるさと夫人は試楽の見物には出て来なかつた。衛門督えもんのかみをこの試楽の日に除外するのは惜しく物足らぬことであると院はお思いになつたし、それ以上にまた人の不審を引くことをお恐れにもなつて、来るようにと使いをお向けになつたが、病の重いことを申して督は出て来ようとしなかつた。病氣といつて

も何という名のある病をしているのでもないわけであるが、やましく思う点があるのであろうと、心苦しく思召して、特使をさえもおやりになつて招こうとあそばされた。父の大臣も、

「なぜ御辞退をしたかね。何か含むことでもあるように院がお思ひになるだろうに。大病というのではないのだから、無理をしても参つたほうがよい」

と勧めていたところへ再度のお使いが来たのであつたから、つらい気持ちをいだきながら参つた。それはまだ他の高官などの集まつて来ない時分であつた。これまでのようにお座敷の御簾みすの中へ衛門督をお入れになつて、院御自身はまた一つの御簾を隔てた奥のお居間においでになつた。噂うわさのとおり非常に痩せて顔色が

悪かった。平生もはなやかな派手な美しさは弟たちのほうに多くて、この人は深く落ち着いた静かな風采ふうさいによさのあつた人であるが、今日はことにおとなしい身のとりなしで侍している姿を、内親王の配偶者として見ても相応らしい男であるが、その関係の正しくないのが不快だ、憎悪ぞうおを覚えずにはおられないのであると院は思召したが、さりげなくしておいでになった。

「機会がなくてあなたにも長く逢あいませんでしたね。長く病人の介抱をしていて何の余裕もなくてね、前からここへ来ておいでになる宮が、院の賀に法事をして差し上げたいと言っておられたのが、いろいろな故障で滞とつていてね、今年も暮れになったので、これ以上延ばすこともできず、以前に計画したとおりのことはと

とのわないが、形だけでも精進のお祝い膳ぜんを差し上げる運びになつて、賀宴などというとないたいそうだが、親戚しんせきの子供たちの数がたくさんにもなっているのだから、それだけでも御覧に入れようと思つて舞の稽古けいこなどをさせ始めたものだから、せめてそれだけでもうまくゆくようにと思つて、拍子が合うか試してみるのです。が、指導をしていただくのに、だれがよいかともよく考える間がなく、あなたに御面倒を見てもらうのがよいときめて、長くおいでもなかつたお恨みも捨てたわけですよ」

とお言いになる院の御様子に、昔と変わった所もないのであるが、衛門督は羞恥しゆうちを感じて自身ながらも顔色が変わっている気がして、急にお返辞ができないのであつた。

「長らく奥様がたが御病氣をしておいでになりますことを承つて  
おりまして、御心配を申し上げながら、前からございました脚氣かっけ  
がしきりに出てまいりまして、歩行が困難でございましたために  
御所へ上がることができませんで、すっかり世の中から隔離され  
ましたような寂しい生活をいたしておりました。院がおめでたい  
年に達せられますので、こうぎ年来の御交誼こうぎに対してまずお祝いを申し  
上げなければと父が申しておりましたが、関白を拜辞しました自  
分が表だつて出ることよりも、地位は低くとも中納言の私が主催  
するのが妥当であると父は考えるようになりまして、私の誠意を  
お目にかくべきだと勧められましたものですから、病体をおして  
あちらへはお伺いいたしましたのでございます。いよいよお寂しい静

かな御生活のように拝見いたしましたあちらの御様子では、はなやかな賀宴をお持ち込みあそばすようなことは恐縮なされるだけではないかと拝察されまして、こちら様の御質素な御計画はかえって御満足になることかと存ぜられます」

と衛門督えもんのかみが申すと、華奢かしやを尽くしてお目にかけてという前日の賀宴を女二の宮の關係でしたとは言わずに、父のためにしたと話すのに心の鍛錬のできていることがうかがわれると院は思召された。

「私の所でやらせていただくことはこのとおりに簡単なことであるのを見て、一概に悪く言う人もあるであろうと思つていたが、理解のあるお言葉を聞いて、さすがにとあなたにはいよいよ敬意

が払われる。大将は役人としては少しは経験ができたようでも、そうした繊細な観察をすることなどは、得意でもないだろうが、つこうだめですよ。法皇はあらゆる芸術に通じておいでになるが、その中でも最も音楽の御造ぞうけい詣が深いから、それらに遠ざかっておいでになる御出家後といえども院が御覧になるのだと思うと暗れがましいのですよ。あの大将といつしよに、舞い手になる子供へ、心得べきことをよく注意しておいてくれたまえ。専門家の師匠というものは自身の芸には偉くても融通のきかないものだから、などとお命じになるなつかしい味のある院の御様子をうれしく拝しながらもまた衛門督は恥ずかしく、きまり悪く思われて、言葉少なにしていて少しも早く御前を立って行きたいと願われる心



から、以前のよう<sup>に</sup>細かい話し<sup>ぶ</sup>りは見せず<sup>に</sup>いるうち、ようや  
 く願<sup>い</sup>どおり<sup>に</sup>ここを去る<sup>に</sup>よい時を見つけた。東北の御殿で大  
 将<sup>が</sup>掛<sup>り</sup>にな<sup>つ</sup>て十分に用意してあ<sup>つ</sup>た舞<sup>い</sup>手と楽<sup>人</sup>の衣装<sup>な</sup>ど  
 が、また衛門督の意見によ<sup>つ</sup>て加<sup>え</sup>られるものもできた、その道  
 には深く通じている衛門督であ<sup>つ</sup>たから。今日は試楽の日なので  
 あるが、これだけを見物するのにとどまる夫人たちも多<sup>い</sup>ため、  
 目美しくして見せるの<sup>に</sup>、賀の当日の舞<sup>い</sup>人の衣装は、明<sup>る</sup>い白<sup>し</sup>  
 ろ<sup>つ</sup>る<sup>ば</sup>み  
 橡<sup>に</sup>紅紫<sup>の</sup>下<sup>した</sup>襲<sup>が</sup>ね  
 を着<sup>る</sup>はずであ<sup>つ</sup>たが、今日は青<sup>い</sup>色<sup>を</sup>  
 上<sup>えんじ</sup>に臙脂<sup>を</sup>重<sup>ね</sup>させ<sup>た</sup>。今日<sup>の</sup>楽<sup>人</sup>三十<sup>人</sup>は白<sup>しろ</sup>襲<sup>が</sup>ね  
 であ<sup>つ</sup>た。  
 南東<sup>の</sup>釣<sup>つり</sup>殿<sup>どの</sup>へ続<sup>い</sup>た廊<sup>の</sup>室<sup>むろ</sup>を奏<sup>へ</sup>楽<sup>室</sup>にして、山<sup>の</sup>南<sup>の</sup>ほうから  
 舞<sup>い</sup>人<sup>が</sup>前庭<sup>へ</sup>現<sup>わ</sup>れて来<sup>る</sup>間<sup>は</sup>「仙遊霞<sup>せんゆうか</sup>」という楽<sup>が</sup>奏<sup>さ</sup>れ

ていた。ちらちらと雪が降つて、もう隣へ近づいた春を見せて梅の微笑ほほえむ枝が見える林泉の趣は感じのよいものであつた。

縁側に近い御簾みすの中に院のお席があつて、そこにはただ式部しきぶき卿ようの宮が御同席され、右大臣の陪覽する座があつただけである。

以下の高官たちは皆縁側に席をして、そこには形式を省いた饗きやう

応おうの物が出されてあつた。右大臣の四男と、左大将の三男、そ

れに兵部卿ひやうぶきやうの宮の御幼年の王子お二人の四人立ちで万歳楽が

舞われるのであるが、皆小さい姿でかわいかった。四人とも皆高

い貴族の子供たちで風貌ふうぼうが凡庸でない。皆にいたわれながら小

公子たちは登場した。また大将の典侍腹てんじばらの二男と、式部卿の宮

の御長男でもとは兵衛督であつて今は源中納言となつていている人の

子のこの二人が「皇こうじょう」、右大臣の三男が「陵王りょうおう」、大将の長男の「落蹲らくそん」のほかにも「太平楽」「喜春楽」などの舞曲も若い公達きんだちが演じた。日が暮れてしまふと御前の御簾は巻き上げられて、音楽にも舞にもおもしろみが加わつてゆく。かわい  
い姿の御孫の公達は秘伝を惜しまずそれぞれの師匠が教えた芸に、  
よい遺伝からの才氣の加味された舞をだれもだれもおもしろく見  
せるのを、皆かわいく院は思おぼしめ召した。老いた高官たちは皆落涙  
をしていた。式部卿の宮も御孫の芸にお鼻の色も変わるほど感動  
されたのであつた。六条院が、

「年のゆくにしたがつて酔い泣きをすることがますます烈はげしくな  
つてゆく。衛門督えもんのかみのおかしそうに笑つておられるのが恥ずかし

い。歲月はさかさまに進むものではないからね。あなたがたでも老いのがれられないのですよ」

と言つてその人の顔を御覧になる。だれよりもまじめに堅くなつていて、偽りでなく身体からだの具合も悪く思われ、おもしろいことも目にとまらぬ気持ちになつている衛門督を、お名ざしになり、酔態に託してこう仰せられるのは戯れらしくはあつたが、その人ははつと胸がとどろいて、めぐつて来た杯は手に取つてもただ少ししか飲まないのを、院は見とがめになつて、御座からたびたび侍者に酒を持たせておつかわしになり、おいしいになるのを、困りながら辞退する取りなしなども、平凡な人とは見えぬ感じよく院はお思いになつた。身心の苦痛に堪えられなくなつて衛門督はま

だ宴の終わらぬうちに辞して帰ったが、悪酔いからさめることのできないのは、院を目のあたり見て罪の自責に苦しんだために逆上したのであろうが、それほど臆病おくびょうな自分ではなかったはずであるがと悲しんだ。一時的な酒精の毒ではなくてそのまま衛門督は寝ついて重い容体になった。衛門督の父母がよ所に置いてあるのが不安になり、自邸へつれもどすことにしたのを、夫人の宮の悲しがつておいでになるのがまた衛門督には苦しく思われた。何事もなかった間は、衛門督自身も、宮をお愛しする情熱のありなしすら忘れていくほどの良人であったが、もうこの世での別れかもしれないと予感される今日の心には、宮をお残しして行くことが悲しくて、未亡人の寂しい人におさせするのが堪えられない苦

痛に思われ、またもつたいなくも思われ歎なげかれるのであった。宮の御母の御息所みやすどころも非常に悲しんだ。

「世間の慣ならいでは親は親として、御夫婦というものはどんな時にもごいっしょにおいでになることになっていきます。あちらへ移っておしまいになって、御回復なさるまで別々においでになるのは、宮様のためにおかしいそうなことですから、せめてもうしばらくの間こちらで養生をなさいます」

この人が病床との隔てに几帳きちょうだけを置いて看護をしているのである。

「ごもつともです。私ごとき者と結婚をしてくださいました宮様のためには、せめて私が長生きをして相当な地位を得るように努

力せねばならぬと心がけてはいたのですが、こんな病人になってしまいましたは、私の愛がどれほどのものであつたかを宮様にわかつていただけなくて終わるかと思ひますことで、もう命の助からぬような氣のしますうちでも、死なれぬ氣がするのです」

などと泣き合つていて、迎えようとするのに、すぐに移つても来ないのを母の夫人は氣づかわしがつて、

「そんな場合に、どうして親の所へ来ようとあなたは思つてくれないのだらう。私が病氣をする時には、おおぜいの子供の中でも特にあなたがそばにいてほしく、またいてくれれば頼もしくてうれしいのだのに、いつまでもなぜそちらにあなたはいる」

こんなことを使いに言わせて来るのにももつともなところがあ

つて、衛門督えもんのかみは母へ同情をせずにはおられないのであった。

「私がいちばん初めに生まれたためなのでしょうが、大事にされていまして、こんなになつてもまだ母はかわいがりまして、しばらくの間でも逢あわずにいることを苦しがるのですから、もう頼み少ない病状になつている際に、母の逢いたがる心を満足させないのは未来の世までの罪になるだろうと思われれますから、とにかく病床をあちらへ移します。もういよいよ危篤になつたというしらせがありましたら、そつと大臣邸へおいでなさい。必ずもう一度お目にかかりましょう。ぼんやりとした性質なものですから、気もつかずにあなたを不愉快におさせしたような場合もあつたであらうと思われれますのが残念でなりません。こんなに短命で終わる



うとは思いませんで、長い将来に誠意をくんでいただけの日が必ずあるもののように思つて安心していました」

と、衛門督は宮に申して、泣く泣く父の家へ移つて行つた。宮はあとに思いこがれておいでになつた。大臣家では病人の扱いに大騒ぎをして、きとつ祈禱やその他に全力を尽くすのであつた。病は最悪という容態でもない。ただ食しよくよく慾がひどく減退して、もうこちらへ来てからは果物くだものをさえ取ろうとしなかつた。教養の足りた優秀な高官と見られている人が、こんなふうに頼み少ない容体になつてゐることを世間は惜しんで、見舞いを申し入れに来ぬ人もない。宮中からも法皇の御所からもしばしばお見舞いの御使みつかいが来て、衛門督の病状を御心痛あそばされているのを見て、両

親は悲しくばかり思われた。六条院も非常に残念に思召おぼしめして、たびたび懇切なお見舞いの手紙を大臣へ下された。左大将はまして仲のよい友人であつたから、病床へもよく訪ねたずて来て、衛門督をいたましがつていた。

法皇の御賀は二十五日になつた。現在での花形の高官が重い病氣をしてその一家一族の人たちが愁うれいに沈んでいる時に決行されるのは寂しいことのように院はお思ひになつたが、月々に支障があつて延びてきたことであつたし、ぜひ今年じゆうにせねばならぬことでもあつたから、やむをえぬことだったのである。院は姫宮の心情を哀れにお思ひになつていた。かねての計画のように五十か寺での御誦ずき経きやうが最初にあつて、法皇のおいであそばされる

寺でも大日如来だいにちによらいの御祈りが行なわれた。



# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：門田裕志、小林繁雄

2004年2月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

## 若菜（下）

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫  
著者 紫式部  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>